
～ 吉良吉影は静かに生き延びたい～

どくたあ ちょこら～た

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜吉良吉影は静かに生き延びたい〜

【Nコード】

N6146Y

【作者名】

どくたあ ちょこら〜た

【あらすじ】

これは『【呪い】を解く』物語

自覚症状無く進行してゆく病のように杜王町を蝕んでいた、一人の男。彼の名は【吉良吉影】
二度殺された筈の彼が目を覚ましたのは、彼岸花の咲き誇る異様な墓地だった。その場所の名は【無縁塚】、実体と幻想、幽世が交わる異常な空間。そこで突如【謎の少女】の襲撃を受け、彼は否応なしに【幻想郷】へと迷い込んでゆく。

【忘れられて生きる】ことを望む彼に【運命】が下した罰、それは【忘れられた者達の世界】で生き、暴かれ、晒され、殺されることであつた。

【裁きの地】で彼を待つものは、【救い】か、【報い】か。

ジヨジヨの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs-livedoor.jp/otaku/11393/>】より
転載。

第一話 外の世界から来た殺人鬼（前書き）

初めまして、どくたあ ちよこらくと申します。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】にて、キラ ヨシカゲの名前で活動しております。

完結間近の連載小説をこちらに転載することにいたしました。稚拙な文章力ですが、読んでアドバイスをいただけると幸いです。

注意

・「東方project」「ジョジョの奇妙な冒険」の二次創作作品です。

・自己設定、自己解釈、ご都合主義、キャラ崩壊、原作に登場しない能力の成長、グロテスクな表現、暴力シーンを多量に含んでおります。

第一話 外の世界から来た殺人鬼

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

第一話 外の世界から来た殺人鬼

彼は、目を覚ました。

「ここは……………」？

彼はゆっくりと体を起こし、辺りを見回す。見渡す限り真っ暗闇で、暫く何も見えなかった。やがて暗闇に目が慣れ、周りの景色が朧気ながら見えるようになる。

そこはうつそうとした夜の森にぽっかりとあいた、

彼岸花が咲き乱れる広場だった。

空を見上げたが、新月だからだろう、全く明かりのない暗黒のプロネタリウムが目に入るだけだった。

「……なんだ………？」

どうしてわたしはこんなところにいる……？ここは………何処なんだ………？わたしは………」

彼は地面に座ったまま、どうして自分はこんなところに倒れていたのか記憶を辿る。

「（………確か………私は【バイツアダスト】を発動させようとした………だが広瀬康一のクソガキに阻止され………承太郎に時を止められて………その後は………）」

迫るタイヤ

犬に喰い千切られ

た左手

無数の手

引き裂かれる体

さあ……？でも……「安心」なんてない所よ………少なくとも………」

「うああああああアアアアアアア
全てを思い出し、男 吉良吉影は、絶叫した。

「!」

「(そうだ…私は死んで……………!)」
汗がダラダラと噴き出し、息が荒くなる。

ドグン ドグン

一度はその鼓動を停止した心臓が恐怖に縮み激しく脈をうつ。

「(ッ!?)」

再び辺りを見回すと、さっきは気付かなかった光景がはつきりと目に飛び込んで来た。

そそりたつ卒塔婆

墓石代わりに積まれた石

散らばった人骨

辺りに満ちる【死の気配】と、撒き散らされた鮮血のように紅い華が、彼に否応なしに
【死後の世界】というものがあるなら
【安心】なんてない、【最悪の世界】を連想させる。

「ハア

ハア ッ ハア

ハッ 「

(ば……………馬鹿な……………ッ!?まさか、まさかッ!?)

ここが【地獄】だと言っのかッ!」

彼は胸を押し潰す不安を押さえつけ、自分を裁く【鬼】が現れるの

を迎え撃つため神経を張り詰める。

「（そういえば【スタンド】は使えるのだろうか？）」「
彼は祈るような気持ちで、自身の精神の片割れの名を呼んだ。

「【キラークイーン】！！」

彼の心に応えるように、それは隣に出現した。

猫とドクロを足して2で割ったような凶悪な顔、筋骨隆々の四肢、
そして全身のドクロマーク。

彼の【スタンド】、【キラークイーン】だ。

「よし、【キラークイーン】は問題なく使えるな

……………」

吉影はホッと安堵の溜め息を吐く。

ともかく、これで多少の危機には対応できる。

吉影の心に【安心】が染み渡っていき、同時に幾分か冷静さが戻っ
てくる。

「（ここで座り込んでいたって仕方ない。

地獄に森があるかは知らないが、どうも肉体は実体があるようだ。

それに、落ち着いて考えてみれば地獄に卒塔婆や墓なんてのも妙な
話……

もしかしたらここは【地獄】ではなく、【この世】のどこかなのか
も知れない。

それなら早くこんな場所抜け出して、人の営みのある場所に向かう
べきだろう。）」

吉影は立ち上がり、辺りを見回そうとした時、

「うおっ！！」

吉影の目の前に、突然1人の人影が現れた。

「（なんだ、子供か……）」

彼の前には、一人の少女が立っていた。

ほっと息をはく吉影。

その少女はどうみても日本人には見えなかった。

森の闇に映える金髪、赤い目、白い肌、欧米人の風貌である。

「（どういうことだ……？こいつのこの【風貌】……
まさかわたしは日本から遠く離れた国まで飛ばされたというのか…
…！？一応英語は話せるが、この娘に通じるだろうか……？）」

吉良吉影は、このとき、冷静さを若干喪失していた。

死後起床したばかりなのもあつただろう、が、何より自分の置かれた状況の把握に気を取られ過ぎていたのだ。

そう、彼は疑問に思う事はなかった。

『なぜこんな暗い夜の森の奥に、こんな少女が一人でいるのか』

さて、吉影はとりあえずその少女の様子を伺うことにした。
少女はまじまじとこちらを観察するように、現れてからずっと好奇の目で見ている。

「（何から話そう…取り敢えずは適当な挨拶を交わし、会話が通じるなら自宅まで案内してもらおうとするか。

ここが何処なのかその後訊けばいい…）」

吉影が口を開こうとした時、

「ねえ、あなた………」

少女が口を開いた。

「（？」

こいつ……今なんと言った？日本語か？

聞き違いかもしれないが、一度日本語で話し掛けてみるか。」

吉影は【いつも通りの】柔らかい物腰で、少女に話し掛けようとした。

「あの、すまないが」

その刹那

！

「

間？」

少女はあどけない表情で彼に質問した。

「……………」

吉影は無言でポケットから何かを取り出すと、少女に向かって投げつけた。

少女はそれを手でキャッチし、

「何これ？甘そう匂い……」

なんだかとても美味しそう」

それ チューインガムを口に入れた。

「う〜ん、甘い」

ガムを噛みながら、少女は幸せそうに笑う。

「言っとくけど、これの代わりに見逃してくれなんて、聞くつもりはないよ？」

これを食べたらずぐにでも……………」

「 …… 質問に……………」

「？」

「質問で返すなアアアッ！！」

カチッ

吉影は【キラークイーン】のスイッチを押した。

ドゴオオオオオオオ！

「きゃああああああ……………！！」

少女が断末魔の叫びを上げた。

強烈な衝撃が彼女を内側から襲う。

少女はバタリと倒れ、動かなくなった。

「【キラークイーン第一の爆弾】…………… お前の脳ミソは3分の1ほど顔面とシェイクされた。」

吉影は倒れている少女を冷徹に見下ろし、呟いた。

「（ スタンド使いではない、それは言える。」

だが、あの【光の弾】は何だ？それにこいつは、自分は『人間ではない』かのような言動をした。

『食べてもいい人類』……『外の人間』……

「一体こいつは何でここはどこなんだ……?」

「（　　）　　考えても仕方ない……　　とりあえずは【今最優先すべきこと】をしよう……」

彼は少女の死体に歩み寄り、見下ろす。

「　　フフフ……、しばらく出来なかったが、ここにあるのクソツタレ仗助がいないことは確実……」

「今なら安心して【彼女】を連れて歩くことができるぞ!」

【キラークイーン】の腕が振り上げられる。

「さあ……」

私の下に來い!!手首だけなッ!!」

【キラークイーン】の手刀が、振り下ろされた!!

メキメキという音が静けさを破壊し、飛び散る鮮血が森の闇を塗り替える!!

「　　な……ッ……」

吉影が、絶句した。

「何だとオ……ッ?!」

吉影の顔が苦痛に歪む。

「そんな馬鹿な!?!」

少女の手が、吉影の足を握り潰していた。

「ぐおおおおおお!?!」　　足が悲鳴をあげる。

今にもちぎれそうだ。

「捕まえた」

少女が顔を上げ、吉影の顔を見上げた。

その顔には傷も内側から力を加えられた跡も残っておらず、目は爛々と喜びに輝いていた。

もつとも、その輝きは子供の無邪気な笑顔とは程遠い、悪事が成功した時の邪悪な喜びからくるものだったが。

「（確かに効いたはずだ！脳をシェイクされてもこれほど元気など、たとえ人間でなくてもあり得ん！）」

「えへへへさつきのはちよつと驚いたよ。」

でもこれで…逃げられなくなったね！」

「ぐああああああ！！」

少女の手に力が加わる。足の肉は裂け、骨もヒビがはいってきている。

「（マ、マズイ！このままだと足を持って行かれる！！）」

「【キラークイーン】ッ！！」

スタンドの脚で少女の顔面を全力で蹴り飛ばした。

「きゃあっ…！！」

少女は吹き飛び、木に打ちつけられてずるずると倒れた。

「ハア…ッハア…！！」

吉影は足の具合を確かめる。

「（クソッ！なんて馬鹿力だ…この足ではとても逃げられん…！！）」

吉影は舌打ちし、少女を睨み付ける。

「やっぱりあなた、普通の人間じゃあないね。念力のような力なのか？」

少女は先程と同じように平然と起き上がった。さすがに今回は頭から大量出血しているが。

「（畜生め…！！何故あれほどの傷を受けて立っていられるんだ！？）」

腹に大穴があいている彼も大概だが、吉影は少女の頑強さに胸の内です毒吐く。

「さつきは不意打ちでやられたけど、今度こそ晩ごはんのメインデイスシユにしてあげる！」

吉影は直感した、何かがくる！！

「【キラークイーン】ッ！！」

彼のスタンドに防御の構えをさせる。

「ブラックアウト!!」

少女が声を張り上げた次の瞬間、少女の体がどす黒い霧に包まれ、霧は瞬く間に吉影を飲み込んだ。

「(な、なんだこれはッ!?)」

吉影の視界は墨で塗り潰されたように黒一色に染まった。

「(まずい、これでは防御が…!)」

ドドドドドドドド!

「ぐおおおおお!?!」

キラークイーンの手を抜けて、十発近くの光弾が吉影の体を抉る。

「あぐああアアアアア

ッ!」

暗黒の視界の中、衝撃で吉影の身体は宙を舞った。

突如視界に光が差し周囲の光景が見えるようになった。

彼はさつき立っていた場所から吹き飛ばされ、木の生えていない明るい場所に倒れていた。

「あぐっ、どうやら当たったみたい」

少女は空に浮かび、こちらに近寄ってくる。

「(こいつ…命中したことが分かっていない…?)

つまりこいつも見えなかったのか?

ということはいいつの能力は… 『【闇】をあやつる能力』か!!(

」

しかし分かっててもどうしようもない。熱源を追尾する【シアーハ

ートアタック】なら通用するかもしれないが、光弾が直撃して暴発する可能性が高く使えない。

「さあ…次でトドメだよッ!」

少女の体が再び霧に包まれる。闇が彼を呑み込もうと迫りくる。

「(こ…ここまでなのか…?わたしは…

せっかく生き残ったというのに…!またわたしは死ぬのか…!?)

このガキに喰われて…!?)」

彼は、空を見上げた。

月の無い漆黒の夜空は、彼の心情を反映するようにその暗黒なノックペリとした面を向け見下ろしていた。

「(この【新月の夜空】のように……! 【暗闇の絶望】の中死ぬというのか……ッ!一度ならず二度も……)」

その時、吉良吉影の脳内に最悪の情景が浮かんだ。

河川で

下水道で

解剖室で

広場で

街道で

この地上のありとあらゆる場所で残酷に死に続ける自分の姿を。

「(まさか……これが【小道の力】だということか……?永遠にこのわたしを【死】という地獄に捕え続け……【無間地獄】を味わわせようというのか……ッ?)

【希望】なんてどこにも見えない……【地獄の底の底】に、わたしを閉じ込めるつもりか……?

そんな…そんな馬鹿なア…ッ!!)」

彼は、無意識に爪を噛んでいた。絶望、その二文字が彼の心を支配していた。

少女の放つ闇が、吉影に襲い掛かる。

「(いや……)」

吉影の瞳に、突如光が灯る。

「(わたしは、確かに死んだ……だが、今生き返っている。これはあり得ない【奇跡】……!)

まだまだ……まだ終わってない! 【運命】はわたしに味方しているッ!

このクソガキはッ……！【試練】だ……！わたしが乗り越えなくてはならない【敵】だッ！」
闇の霧が吉影の視界を染めた。

闇に包まれる吉影。

無差別に飛び交う光弾。

「さあ、今夜は久しぶりの人肉だ」

少女ルーミアが能力を解除した。再び星の光が森の中を照らす。その星明かりの中には、さっき殺した人間の死体が転がっている……はずだった。

「えっ何で……？」

ルーミアが星明かりの中に見たのは、無傷で宙に浮かぶ吉影の姿だった。

「そんな、全弾当たったはず！だって何処にも弾が木とか地面に当たった跡が……」

「そうだ、確かに当たった。だが、それらが全く効いていなかったとしたら？」

「そ、そんな！？あなた……本当に人間？」

「いいや、私は吉良吉影……殺人鬼という名の鬼だ。」

吉影は、上半身だけが宙から現れたかのような不思議な姿勢で浮かんでいた。もしスタンド使いがこの光景を見ていたら、トリックが分かっただろうし、もう少しさまになっていたはずだ。

彼は自分の身体をキラークイーンの腹部に収納し、身を守った。

つまり彼はキラークイーンを鎧にしたのだ。

「（【ストレイ・キャット】を入れていたスペースに、こんな使い方があったとは……）」

窮屈であることを除けば、最高の防御だ。キラークイーンもかすり傷程度で済んでいる。」

吉影は腹部の中からキラークイーンを見た。半透明でショッキング

ピンクの肉体は暗闇の中普段よりさらに禍々しく、不気味に、そして艶かしく輝いていた。

「くっ、だったらもう一度…」

少女が追撃を加えようと身構える。が、吉影はそれを制した。

「無駄だ、既に行動は終わっている！」

「ハッ！！」

ルーミアは自分の体を見た。

「そんな！？何でさっき吐き出したものが…」

彼女の服には、ガムがべったりと付いていた。

「お前は、自分の作り出した 闇の中で、ものを見ることが出来ない。また、お前は最初に闇を解除した時、闇を作った時と同じ場所にいた。つまり！！」

吉影が勝ち誇ったように叫ぶ。

「あの光弾乱射…自分も捲き込まれるんだろう？迂闊に動くと…！」

少女がギクツという擬音がよく似合う反応をした。

「そして、動けないなら目が見えなくともガムをぶつけることは容易い！」

少女ははっと気付き、ガムを取ろうとするが、なかなか離れない。

「遅い！！キラークイーン第一の爆弾！」

ドグオオオオオオオオオオ！！

ガムが爆発した。

第一話 外の世界から来た殺人鬼（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございました。

次話以降も順次更新していくので、ご期待ください。

第二話 漂着 (前書き)

第二話です。説明回なのでまだあまり盛り上がっていませんが、話あたりから面白くなるかと思われず。
では、御覧ください。

シヨシヨの奇妙な東方Project避難所【<http://jbbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】より
転載

第二話 漂着

「むっ……………?」

「わは〜」

爆煙が晴れ、吉影が目を開けると、少女が宙を飛び逃げていくのが見えた。

「直前に服ごと破り捨てて逃げたか……………」

吉影は追いかけるのを諦め、【キラークイーン】の腹部の空間から出ると、足の様子を確認する。

「……………不味いな、立っているのがやっつとだ…」

かといって、ここにいてもさっきの奴みたいなのが襲ってくるかもしれない……………」

顔をしかめ、辺りを見渡す。

吉影が倒れていた広場からかなり吹き飛ばされ、彼は赤い彼岸花の咲き誇る道に立っていた。

葉が無く、先端に大きな赤い華をつけた花が、地面から何本も真っ直ぐに生えている。

この場所の名は【再思の道】。

彼岸花の毒に冒され、不快感とともに生きる気力が湧いてくる不思議な場所である。

そして、外の世界から迷い込んだ自殺志願者たちはここで生きる活力を与えられ引き返していくのだが、再び生き直そうと決意した矢先、彼らを待ち受けているのは大抵が不遇な死なのだ。

そんな呪われた場所に立っていることを、その時の彼は知るよしもなかった。

「……… 凄い数の彼岸花だ………」

おかしい…彼岸花の季節は秋……今は夏の筈だが………」
言いかけて、ブルツと身体を震わせる。

「……… 今まで気付かなかつたが……… 幾分か肌寒いな。

【小道】のパワーに引きずられてここに出るまでに、季節が変わったのだろうか………」

しかし、そう言いながら吉影は少し違和感を覚えていた。なんと言おうか、肌寒さの中に命の芽吹きのような活気を感じたのだ。

ふと、背後に気配を感じ、彼は振り返った。

「………」

目に入った光景に、目を見開く。

広場の中、寂しげに立ち尽くす数本の桜。さつきまでは葉が全て落ち、冬の生命力が枯渇した様相を示していた、

筈だったが、

「な………」

信じがたい事だが、蕾がひとつまたひとつと枝先に現れていく。

瞬く間に蕾が目に見える様子で一斉に開花していき、忽ち満開となった。

絢爛たる紫色の桜花がはつと息を呑むほど美しく、咲き誇る。

かと思うと、その刹那桜花は風に吹き千切られるようにはらはらと散っていった。

その情景はこの場所全体が、結界の狭間の犠牲者たちを弔う追悼の涙を流しているようで、見る者に儚くもの悲しい印象を与える。

花びらは地面に落ちると、粉雪が溶けるように朽ち墮ち、消えていった。

「………」

放心したように、瞬きひとつせず一連の現象に魅入っていた吉影は、我に返り、ふと自分が涙を流していたことに気づいた。

「（なんだ……？何故わたしは……）」

この場所　　無縁塚が哭いているような錯覚、水を打ったような静寂と、舞い散る桜花の美しさと哀しさに、知らず知らずのうちに感涙したというのだろうか。

訝しがりつつも、吉影は涙を拭い呟く。

「　理解できないが……恐らく、今は春だ。彼岸花が咲いてはいるが、とにかく春だ。なぜかそういう【確信】がある……」

問題は、この見知らぬ場所が明らかに異様な土地だということである。

寂れ荒れ果てた墓地、春だというのにこの場所を守るように入り口に咲く彼岸花の群れ。なんらかの【小道】との関係を示唆しているように思えてならない。

「……ここにこれ以上いるのはマズイ……一刻も早くこの場から離れたいが……」

【キラークイーン】に支えてもらい、彼岸花の道の向こうを一瞥した。墨を流したような闇が広がっている。

「…この彼岸花の道を通って森に入って行こうというのは、気乗りしないな……またさっきのクソガキのような【得体の知れないヤツ】と出くわすかもしれない。」

彼は上を見上げた。森の木々にぽっかりとあいた穴から、暗い夜空が顔を覗かせている。

「【キラークイーン】、私を木の上まで運べ。」

彼のスタンドは命令に忠実に命令に従う。

【キラークイーン】は吉影を抱えると、木のてっぺんまで一気に飛び上がった。こういう時、スタンドは便利だ。四肢の不足分を補ってくれる。ただ単に怪力だったり【能力】を持っているだけでは、こうはいかないだろう。

一際高い樹の枝に登り、足を下ろすと、鬱蒼と生い茂る枝葉の上から周囲を一望することができた。

「おお……………」

目を見張る光景に思わず絶句する。新月の夜空に、杜王町のそれとは比較にならない程の星が煌めいていた。

「おお…なんと綺麗だ……………杜王町も星が多く見えたが、ここに比べれば……………」

今にも落ちて来そうな空の下で、彼は圧倒されていた。

しばらくは新月の星空を眺めていたが、

「ぐうツ……………!?!?」

左脇腹に走った痛みにも、顔を歪める。

「……………うつつ……………!?!?」

目を下ろすと、光弾を受けた部分が大きく抉れていた。

「……………暗すぎてさっきまで気付かなかったが…かなり酷い……………」

幸い、内臓は傷んでないようだ、出血がマズい……………早く何処かで手当てしなくては……………」

『どうやって人のいる所へ行くか』だが……………」

吉影はしばらく思案を巡らせ、ある案を思い付いた。「うまくいか分からないうえ、失敗したらさっきの奴みたいなのに見つかるともしれないが……………やるしかないな。」

右腕で吉影を支えながら、【キラークイーン】が左拳を空に掲げる。

「『キラークイーン第二の爆弾』、【シアーハートアタック】！」

【キラークイーン】の左手の甲から、一発の小型爆弾戦車が放たれた。吉影が【シアーハートアタック】に命じる。

「【標的】は熱源の密集している場所だ。探せ！！」

戦車は吉影の頭上遙か高くまで上昇し、ぐるぐると旋回し始めた。しばらくそうやって熱源を探していたが、

「コツチヲミロオ〜」

「むっ、見つけたか？」

【シアーハートアタック】の向いている方向を見ると、盆地になっている場所が見えた。かなり広い。

「でかしたぞ【シアーハートアタック】！もう戻っていい。」

ほつといたらそこら中の熱源に特攻しかけないので、すぐに【シア
ーハートアタック】を【キラークイーン】左手の甲に格納した。
「さあ、【キラークイーン】、私をあそこまで連れていってくれ。」

【キラークイーン】が彼を担ぎ上げ、木の上を軽快に跳び跳ねてい
く。

酔うかと思っただが、意外と乗り心地は良い。

盆地がぐんぐん近付いてくる。

それにつれて、盆地から漏れてくる光や賑やかな音、人の気配が感
じられるようになった。

「よし、当たり前だ！間違はなく人が住んでいる！」

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

「待て……もしここにいるやつらがさっきのクソガキみたいなのは
かりだったらどうする？」

一度【キラークイーン】に足を止めさせると、しばらく思案に耽つ
た。

「それに、あのクソガキは欧米人の風貌をしていた。日本語を話し
ていたが、ここが日本だとは限らない。何の調査もせず近付くのは
【慎重さ】に欠けた行いだ……」

とりあえず出来るだけ近寄り、【シアーハートアタック】を発射し
てスタンド使いがいなかだけでも探ってみるとしよう……」

【キラークイーン】に命じ、さらに近付く。やがて樹木限界線に到
達し、盆地の様子が分かるようになった。

「なんだ、ここは……」

盆地の中には、塀に囲まれた村があった。

「どついつことだ？この塀、この家、まるで時代劇じゃないか……
!？」

テーマパークかと思っただが、石垣の様子などが作り物ではない本物
であるという事実を物語っている。

「一体どうなっているんだ……？私はどこにいるんだ？さっきのガキは何者なんだ？」

それともやはり既に死んでいて、ここは時代も地域も一つに重なった全人類共通のあの世だということか……？」

てつきり西洋まで飛ばされたと思ったら、今度は時代劇である。どこか拍子抜けし、この力オスな現象に頭を抱える。

頭を抱え、考えをまとめようとした時、脇腹に痛みが走り思考を中断する。

「ぐっ……だが、今はそうは言っていられない……寒気が酷くなってきた……頭痛もする……」

……とにかく、近くに行つて様子を見るしかないか……」

樹上から飛び降り、明かりと喧騒に向かって数歩歩き出したそのとき

「なっ

！？」

ガクン

彼の身体は一瞬、宙に浮いたかのような感覚を伴ったあと、一気に沈んだ。

里の明かりにばかり注意を払っていたため、足下の水田に気付かなかった吉影は見事に足をとられた。

落下の拍子に頭を強く打ち付け、意識が薄れていった。

彼は、目を覚ました。

「……ここは……？」

彼は体を起こし、辺りを見回す。そこは、彼の住んでいた家のような、畳敷きの部屋だった。彼は畳に敷かれた布団に寝かされてい

た。

「（……ウーム、どうやら私はあの後気絶していたらしい。そしてここはおそらく、あの塀に囲まれた里の民家……）」

障子から分かる外の様子だと、夜らしかった。あれから何日経ったのかは分からないが。

彼はふと自分の体に目を落とし、驚愕した。

「（傷が完治している……！？腹に大穴があいていたというのに？）

事実、和服に着替えさせられた彼の体に刻まれていたはずの、光弾を受けた際の生々しい傷は跡形も無かった。

足も確認するが、骨もちゃんと治っていた。状況的にこの家の持ち主が治療を受けさせてくれたのだろうが、彼は警戒を緩めない。

「（この連中はあのクソガキのようなやつらなのだろうか？とりあえずこの家の住民だけでも信用できるか確認しなければ……傷の当てだけでは完全には信用できない……）」
吉影は立ち上がり、スタンドを出現させ、襖を通過させようとして、

「ああ、もう目覚めていたのか。1日中目覚めないから心配していたんだぞ。」

「……！？」

襖が開き、住人らしき人物が入って来たので、慌てて【キラークイーン】を引っ込めた。

「やあ、初めましてだな。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

彼女の自己紹介は吉影の耳には入っていなかった。彼の脳内には目まぐるしく様々な考えが入り乱れていた。

「（青みがかつた白髪、蒼い目、そして奇抜過ぎる……帽子？なんだこいつは……！？日本人なのか？そしてここは……いったい何処なんだ……！？）」

「あの……かなり混乱するのも分かるが、とりあえず一旦落ち着い

て話そうか。」

ハツと我に帰る吉影。脳内に吹き荒れる憶測をまるごと頭の隅にうつちやる。

「そ、そうだな、すまなかった……」

「ゴホン、…では改めて。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

「そうか。私の名は…川尻浩作。しがなサラリーマンだ。よろしく。」

（寺子屋…？時代劇のような言い回しだな。）

君が治療を受けさせてくれたのか？」

「川尻か。こちらこそよろしく。」

（【さらリーまん】？どういった職業なんだ？）

君を治療したのは診療所の医者、私は里の外の水田に血塗れで落ちていた君を発見して、運んで行っただ。」

「そうか……、ありがとう。君はわたしの【命の恩人】というわけだな。」

治療してくれた医者にも、後でお礼を言わないといけないな。」

吉影はそこで一瞬迷った後、思い切って目の前の女性 慧音
に尋ねた。

「ここはいつたい何処なんだ？」

君も日本語を流暢に話すが、まさか日本人なのか？」

それから、この付近で、不審な少女が

「まあ、待ちなさい。とりあえず順を追って説明していききたい

が、何から話せばいいやら……」

君の質問に対する答えは……」

吉影の顔が強張る。

慧音は一呼吸置くと、静かに話の続きをした。

「ここは……君たちのいう日本に存在する【幻想郷】という別世界。

結界によって切り取られた、人と妖怪、神々や魔法使いが暮らす、

「忘れられた者たちの楽園だ。」

「……………」
彼は理解した。彼女が何故日本語を流暢に話しながらも蒼い目や青みがかった白髪をしているのかを。

何故やたらと長く漢字変換もしづらい珍妙な名前を名乗ったのかを。つまり、彼は目の前の女性を、『仮想世界と現実の区別がつかなくなってしまった、痛い子』なのだと認識したのだ。

「あ、あの……………、何か反応してくれないか？」

慧音が少し焦りながら話し掛けた。

「（マズイ、これは疑われてるな……………何とかして信用してもらわないと……………」

そう考えていた時、

突然、吉影がガバツと起き上がり、部屋の隅に置まれていた自分の服をひつつかむと、

「助かったよありがとうこれ以上君に迷惑をかけるわけにはいかな
いから私はそろそろ失礼するでしょうそれじゃあ

クルリと彼女に背を向け、吉影はこの場から去って行くこととする。

「えっ

一瞬呆気にとられた慧音だったが、慌てて立ち上がり呼び止める。

「ま、待ってくれ話を聞いてくれ!!!」

吉影は慧音が入ってきた方とは逆の方向の障子を開け縁側を歩いて足早に玄關と思われる方に向かう。

「いやもうホント感謝してるから私はこれまでもこれからも地に足をつけて真面目に生きていくからもう私に構わないでくれ」

「いやいや待って待ってどう考えても感謝している態度じゃないだろうそれは!!!？」

止めてくれ目を背けないでくれそんな養豚所の豚を扱うような冷たい態度しないでくれ!!!」

「いい加減手を離せ近所の住民に注目されるなんてまっぴらだ……………」

ッ！！？」

すがり付く慧音の手を払い除けようとした瞬間は目を見開いた。

彼

時間が止まったかのように、空気すらも停止し、音がこの世から消え去ったように思えた。

彼の目は、自分の手を掴む慧音の手に釘付けになっていた。

「（この手触り……！この質感……！この滑らかな肌……！）

指の長さ、細さ、爪の大きさ、形、手首の流れるような曲線に気品漂う骨格、小指の第二関節……！！

素晴らしい……完璧だ……！今までに48人の手の綺麗な女を殺してきたが、この手首はまさに神の賜物……！！

ああ……なんと美しい……！手首の造形美に肌のしっとり部分が重なり合う美しさだ……！！

『ハーモニー』とでも言うべきか？『美の調和』と言うべきだろうか！？）」

吉影の爪がメリメリと音を立て、目にもめる早さで伸びる。

「（『彼女』をここに残して去るのは、人生の敗北！私の心に残したまま生涯を終えることになる……！！）」

【キラークイーン】を出現させ、腕を振り上げる。はやる気持ちを抑え、ゆっくりと慧音の白魚のような手首に狙いを定め……

「（さあ、来たまえ……！！私の下に……！！）」

【キラークイーン】の手刀が振り下ろされた！

「ッ！？」

突然グイッと強引に引き寄せられ、慌てて【キラークイーン】を止める。

ビタァッ

手刀は、吉影の腕の薄皮一枚を切って止まった。

「頼む、どうか……これから私がすることを、良く見てほしい。」

慧音の真剣な目付きに、吉影はかろうじて正気を取り戻し、なんとか衝動を抑える。

慧音は庭の木を指差し、吉影に言った。

「君はこれから起こることを、見たことがあるはずだ。君は目を疑うだろうが、信じてほしい、これは手品でも幻覚でもない！紛れもない現実なんだ！！」

そう言つと、彼女は手を木に向け…………

「ハアツ！！」

手から光弾を発射した！

光弾は木の枝をへし折り、枝は焼け焦げながら地面に落ちた。

「……」

吉影は驚愕した。この女性は【キラークイーン】が見えていなかったのだから、スタンド使いでないことは確かだ。

だが、彼女は現に光弾を撃ち出した。やはり、スタンドとは別種的能力が存在していたのだ。

「君の腹部の傷は、この弾幕を受けた傷だろうか？君は既に、ここが君の居た世界とは異なる世界なんだと気付いているはずだ！」

「……………」

「君の気持ちは、よく分かる。いきなり自分にとって非常識な現象を見せつけられ、しかもそれに傷つけられたんだからな。だが、何度も言うがこれは現実だ。いくら疑つても、否定しても、何も良いことはない。私も、君を助けたいんだ。頼む、信じてくれ。」

「……………」

吉影は、暫く黙って考え込んでいた。が、やがてゆっくりと口を開いた。

「……………私は…森で少女に襲われた時、自分の目を疑った…もしかして、頭か精神がいかれてしまったのかと、怖かった……………」

迷いを断つた目で慧音の瞳を見据えると、

「分かった。君を信用しよう。どのみち今人里を出て行けばあのクソガ…少女に、今度こそ喰われるだろうしな。」

「ほ、本当か？本当に信じてくれるのか？」

「ああ、勿論だ。」

これからこの世界…幻想郷だったか？について、詳しく話を聞かせてくれるかね？」

「構わないが、客人に何も出さないわけにはいかない。お茶を淹れてくるから、さっきの部屋で待ってもらえるか？」

「ありがたい。実は喉が渴いていてね。」

柔らかな物腰で話をつけ、吉影は自分が寝ていた部屋へと戻って行った。

「さて…どうしたものか。」

慧音の足音が遠のいてから、吉影は呟いた。

「あのように言っておいたから、まさか私が【能力】を持っているなんて、露ほども思っていないだろう。」

彼は策士である。さっきの言葉は、全て自分の【能力】を勘づかれないようにするための演技なのだ。

「その点については、問題はない。だが……………」

次々と現れ増殖する疑問に、自然とため息が出る。

「別世界だと？妖怪だと？まあ私自身も【スタンド】を持っているし、親父は【写真の世界】を支配する能力を持っていたが……………そういえば、親父…どうなったんだろうな……………」

吉影は、自分の父親のことを案じていた。彼は直接見たわけではなかったが、あのクソツタレ仗助の台詞によると、父親は爆死したらしい

彼の放った爆弾によって。

「……………あの小道へ行くのだろうか。あるいは魂が破壊されて……………」

吉影は、嫌な想像を振り払い、

「ひとまず私を知るべきことは、この世界に【平穏】と【安心】があるかということだ。そして、元の世界に戻る方法を探しだし、いつでも帰れる手筈を整え、確実な安心を得る。」

もしこの世界に、私の望む平穩があるのなら……ここでなんとかして暮らすのも、悪くないかもしれない。杜王町に居られないことは残念だが、ここにはクソツタレ仗助は居ないうえ、私の【正体】を知る者も居ない。

それに……」

吉影の瞳の奥で、影が蠢く。

「（生きている【彼女】にも会える……」

【彼女】のしなやかな指の、妖艶な動きを見ていられる。

【彼女】の、柔らかな肌を、ずっと眺めていられる……」

頬擦りしたり、舐めたりできないのは残念だが……それでも『彼女』が居れば、私の心の平穩は保たれる。ここでの生活が、私の安らぎとなり得る……」

吉影の表情は、はたから見ると、【恋人との幸せな時間】を思い浮かべているような甘い表情だった。

もしそのドス黒い欲望の渦巻く心を地下のマインドスキャン妖怪が覗き込んだならば、反吐を吐くこと請け合いだが。

「ふう……」

台所でお茶を淹れながら、慧音はため息をついた。それは、安心と悩み、双方からくるため息だった。

「とりあえず信じてはくれたが……これで良かったのだろうか……？」
2つの湯飲みにお茶をいれながら、慧音が呟く。

「……いや……言えるはずがない……」

お盆に湯飲みを載せ、河尻の待つ部屋へと向かう。

「彼が既に、『死んでいる』なんて……」

第二話 漂着 (後書き)

御覽いただきありがとうございます。

次回からいよいよバトル展開に突入、ようやくジョジョっぽく仕上がってまいります。R・15表現が多用されるようになりますので、ご注意ください。

第三話 復讐と露見 前編（前書き）

第三話です。やっとバトルシーンに突入し、盛り上がる展開となってきました。

グロ描写、残虐表現、一方的な勝敗が含まれるようになって参りますので、ご注意ください。

ジヨジヨの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs-livedoor.jp/otaku/11393/>】より

転載

第三話 復讐と露見 前編

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

第三話 復讐と露見 前編

「やあ、あんたが件の外来人か。」

「そうだ。私は河尻浩作。君が案内してくれるのか？よろしく頼む。」

「

「いいっていいってそんな硬くならなくて。私は藤原妹紅。健康自慢の焼き鳥屋だ。こちらこそよろしく頼む。」

「済まないな。私のために危険な目に遭うかもしれないのに。」

「大丈夫さ。私は殺しても死なないって有名なんだ。それに、私も暇してんだ。ちょうどいい暇潰しになって、むしろこっちが……」

「も〜こ〜う〜？」

「ははは、冗談冗談。」

睨む慧音に、妹紅が少々慌てて弁解する。

吉影が慧音の家で目覚めてから、彼は外の世界に帰るまでの間、慧音の家に泊めてもらうことになった。

『幻想郷を覆う結界を管理する博麗霊夢という巫女に、とりあえずいつでも外の世界に帰れるように手筈を整えるよう頼み、それから暫くは幻想郷で暮らしてみたい』という、吉影の我が儘を慧音は快く受け入れた。が、診察所の判断で3日間養生することに決まり、その間幻想郷について慧音から詳しい話を聞いたり、人里を観光したりした。

吉影の噂は随分広まっていたらしく、外出時には目立たないよう和服を着ていたが、それでも彼は人々の、異質な存在を見る時の、好奇、そして時には敵意の視線に晒された。

実際には好奇心と好意を持って話しかけてきた人々が多数だったが、

『植物のように穏やかな心』で暮らしたい彼にとってそれらは全て心の平穏を乱す攻撃に他ならなかった。それでも彼は慧音の手首を手に入れるまでの異世界ライフを平和に楽しむため、愛想よく振る舞った。内心早くもうんざりしていたのだが。

そして3日間は大した問題も起きず、予定の日、博麗神社へと向かう朝を迎えた。朝食を済ませ、案内兼護衛の妹紅という少女と挨拶を交わし、二人は博麗神社へと出発した。

彼らは人里から盆地へ出る門をくぐった。

人里の門から少し離れた場所。腰をひねったり、屈伸したりしている妹紅の後ろで、吉影は訝しげにその様子を見ていた。

「さあ、博麗神社までひとつ飛びと行くか！」

妹紅が準備体操を終え、吉影の方を振り向いた。

「ひとつ飛び？私は飛べないが…。」

「分かっているって。だからさ…。」

妹紅が吉影に背を向け、中腰になる。

「さあ、乗ってくれ。」

「…え？」

「いや、だからさ、乗ってくれって言ったんだよ。」

「…大丈夫なのか？」

「心配ご無用。早くしてくれ、あまり遅くなると帰りの途中で日が暮れてしまっぞ。」

「…分かった、じ、じゃあ、よろしく頼む。」

吉影が恐る恐る妹紅の背におぶさる。30代の男が、（少なくとも外見は）10代の少女におぶさるという、かなり滑稽な絵が出来上がった。

「（こ、これは恥ずかしい…。人里の人間の間で噂にならない方がいいが…）」

「さあ行くよ！歯を食い縛りな…！」

「…?!?!?」

一気に地から離れ、森の上空へと弾かれるように飛び出した。眼下を森の木々が流れていく、というか流れ去っていく。鳥の横を嵐の如く過ぎ去り、空の交通安全を乱しながら飛行する。

「どうだい、河尻？これ程高い場所にいるのは初めてか？」

風に白い髪をなびかせて、妹紅は振り返り得意げに笑う。

「…初めての感覚だ…生身でこれ程高く速く飛んだことはなかったな…」

妹紅は、かなりの安全運転で飛行していた。まあそれでもバイクで高速道路を爆走するくらいの風圧はあるのだが。

「生身？生身じゃなければこんなふうには飛んだことはあるのかい？」

「ああ、飛行機といってだな、上空何里もの高さを、ものすごい速さで飛ぶ乗り物があるんだ。種類によっては音の三倍の速さで飛行するものもある。」

「【音の速さ】…！？そ、それは凄い…想像できないな…」

やはり魔法は科学には敵わないのかもしれないね……………」

「いやいや、外の科学ではこんなふうには、何も道具を使わずに飛ぶなんてまだできない。コストも乗り物を造る年月もバカにならないしな。」

「成る程、どちらもそれぞれ長所短所があるということか。」

そんな会話をしながら、二人は博麗神社へと順調に近づいていた。

「おい、なんだあれは？」

「ん？どうした？」

妹紅は前を向き、吉影の指差す方角を見る。

そこには、鳥の群れらしきものがいた。それだけなら大したことないが、問題はその大きさである。普通の鷲だの鷹だの鳶だの、3倍以上の大きさだ。

「おおっと、おいでなすつたな。」

不敵に笑う妹紅。

「なんだあいつらは？まさか妖怪か？」

「その通り！久しく輝夜と殺し合いしてなかったんだ、血がたぎっ

てきたよ……。」

群れはもう目前まで迫って来ていた。群れは列を組むわけでもなく、
てんでバラバラにこちらに突っ込んで来る。凶悪な嘴を打ち鳴らし、
ゾツとするような甲高い咆哮を上げて襲いかかって来る。

「しっかり掴まってるよ!!!」

「!?!?」

ギョーンと加速し、妖怪共の群れの中へ突入する。吉影を一気にGが
襲う。耐え難い力に頭を大きく後ろに反らし、必死に妹紅の肩にす
がる。

先頭の一頭が嘴を開き、妹紅を八つ裂きにせんと、襲い来る。

「キシエエエエエ!!!」

最小限の動きで嘴を避ける。その後ろの二頭の翼をくぐり、次の
一頭の爪を左に避け、三頭の脇をすり抜ける。妹紅は妖怪共の間を
縫うように、瞬く間に群れを突破した。

「チツ、このままじゃ分が悪い……」

後ろを確認した妹紅が呟く。妖怪達は既に急旋回し、追跡して来て
いた。

「しょうがない、一旦地上に降りてあんたを下ろす!」

「なんだと!?!?ち、ちよつと待ってく

うあああ

あああ!!!」

頭から地面に向かって一気にまっ逆さまに急降下する。さすがにこ
の衝撃には耐えられず、キラークイーンの腕を使わざるを得なかつ
たが、幸い妹紅は気付かなかった。真下の森の木々の葉をぶちまけ、
枝をへし折って突入する。地面が見えた瞬間、ギョイン!と身体を
回転させて見事に着地した。

「さあ、これから殺し合いするから、悪いけど自分の足で立っても
らうよ。」

「ま、待ってくれ、腰が抜けて………」

妹紅に下ろされた吉影は地面にへたれこんでいる。

「おいおい、大丈夫かい?そんなんじゃ本当に死………」

……死んじまうな。」

軽い雰囲気だった妹紅の口調が、突如真剣になった。吉影は訝しげに、立ち尽くす妹紅の背から目をはなし、周囲を見回した。そして、絶句した。

樹木の蔭に蠢く、無数の眼。

キラキラと紅く輝く、渴望に満ちた双眸。

二人を囲み、涎を溢れさせながら油断なく隙を伺う、野獣の瞳。

「か、囲まれている……」

「そういうことだ。私でもこの数相手に『護りながら』戦うのは厳しい。死にたくないなら早く立ち上がって……」

「心配ありがとう。だがそれは無用だ。」

妹紅が振り向くと、吉影は既に立ち上がっていた。震え1つ起こさずに、背筋を伸ばして。その瞳に、恐れや不安は感じられなかった。「ほう、やるねあんた。もし私があんたみたいに力もなく、見たこともない化け物の群れに囲まれたら、とてもそんな風には振る舞えないね。」

「何を言っている。私には君という慧音が紹介してくれた信頼できる護衛がいる。なにより、私は戦わない。ただ護ってもらっただけだ。何を足掻こうが無力なのなら、せめて何もしないのが最大のサポートというものじゃあないか。そうだろう？」

「ははっ、確かに戦うのは私だったな。」

空気が緩み、いつもの幻想郷に戻る。命をかけたらしめない、遊び感覚の決闘の雰囲気に戻る。

妹紅は気を引き締め、構える。

「私の背中に近寄れ。できるだけな。」

吉影は素直に従う。

森の暗さに慣れてきて、妖怪共の姿が徐々にはっきりと見えてきた。狼やヒト、熊を普通の3倍ほどに巨大化させたような、人との共通

点など欠片もない獣ばかりだった。

「ふん、知性のあるヤツは居ないみたいだな。これなら遠慮なくぶつ殺すことができる。」

妹紅の放つ気配が豹変する。

近くにいると焼けてしまいそうなほど、強烈な殺気。

何度も殺し、殺されかけた者の持つ覇気。

妖怪共はあまりの迫力に、ジリジリと後退りし、萎縮する。

「（なんとという殺気だ……此処の少女達は皆こうなのか？）」

吉影は内心焦っていた。幻想郷の住民が皆恐ろしく強かったら、彼の安心は確立されず、なにより【恋人】を連れ帰るのに支障をきたす。

「戦う前に一応言っておくが……、私がもし、

万が一死んだら、すぐに死体から離れてくれ。猛ダッシュで逃げるんだ。すぐに妖怪達は吹っ飛ばされる。その間に、一心不乱に逃げるんだ。」

「？……、分かった。」

会話が終わると、妹紅は妖怪の方に向き直った。

「なんだ、かかって来ないのか？食事をしに来たんじゃないのか？腹でも下したか？」

妹紅が一步前に出る。正面の妖怪がたじろぐ。

「そっちが来ないってんなら……こっちから行かせてもらおう！！」

妹紅が懐からスペルカードを取り出し、高らかに挙げ、宣言する。

「時効『月のいはかさの呪い』！」

妹紅を中心に、無数の光弾が放射状に放たれた！光弾は妖怪共の肉を容赦なく抉り、骨を砕き、脳髓を撒き散らした。

「グオオオオオオオ！！」

妖怪共が恐怖を怒りでもみ潰して襲いかかって来る。

「フン、他愛もないね。」

妹紅は次のスペルカードを手に取り、宣言する。

「蓬莱『凱風快晴 フジヤマヴォルケイノ』」

大量の火球がばらまかれ、さらに炎の光線が放たれる。妖怪共は避けながら迫って来たが、そこに追い討ちとばかりに巨大火球が放たれた。向かって来た妖怪共は火球と光線に囲まれてやっとなだつたと気付いたようだ。もう遅い。身動きが取れず団子状態の妖怪に、巨大火球が突っ込む。火球は着弾すると爆裂し、爆発に巻き込まれた何十頭もの妖怪は派手に内臓をぶちまけて吹き飛んだ。血飛沫が樹木の根や土をどぎつい色に染める。

「(す、凄い……！なんといい闘いだ……これだけの数の妖怪を、たった一人で圧倒している。爆発の威力はほぼ互角だが、攻撃範囲、手数が桁違いだ。真正面から戦えば、確実に負ける。こんなやつらがごろごろ居るのか？この幻想郷には……)」
顔に影がさした。ハツと上を見上げる。

「妹紅！上だ！！」

さつき逃げ切ったと思っていた鳥の妖怪達が嘴を打ち鳴らし、急降下して来ていた。

「不死『火の鳥 鳳翼天翔』！！」

妹紅がスペルカードを抜き、宣言する。

不死鳥をかたどった三つの爆炎が迎撃する。爆炎は妖怪二、三頭を一瞬で消し炭にし、さらに後から突っ込んで来た四、五頭を骨にする。そのまま落ちて来た骨を蹴りでぶち壊す。

「(しかも肉弾戦まで……！まさかこいつも人間ではないのか?)」

吉影の思考はその対象の叫びによって中断された。「危ないっ！

！」

「うあっ!?!」

妹紅に襟首を掴まれ、強引に空中へと引き摺られるようにして飛んだ。一瞬前まで立っていた場所に巨大な岩が落ちてきた。

「畜生、あいつだ!！」

妹紅の視線の先にはやや離れた場所にヒヒの妖怪がいた。どうやらこいつが投げたようだ。

「ッ！」

また上だ!!」

「はっ!?!」

まだ残っていた鳥妖怪が、目前まで迫っていた。

「まずい!!」

妹紅は急旋回し凶悪な嘴 を避けた。だが……

「うわっ!!」

「し、しまった!!」

吉影から手を放してしまった。吉影は地面に激突する直前に【キラークイーン】を出現させ、その腕でバレないように受け身をとる。

即座に立ち上がり、妹紅の様子を確認したが、どうやらバレなかったようだ。

「河尻!危ない!!」

妹紅が必死の形相でこちらにもものすごい速さで飛んで来た。

「ハッ!!」

振り返ると、巨大岩が一直線に飛んできた。

「(まずい!!)」

キラークイーンを出現させ、自分はその場に伏せる。巨大岩を自分に当たらないように、そして不自然に見えないように、絶妙に軌道修正して受け流した。

「(危なかった……だがこれでひとまず危機は回避できた……、

…ッ!?!)」

妹紅は空中で止まっていた。吉影に驚愕の表情を向けながら。

「(何イ!?!まさかバレたのか?そんな馬鹿な!軌道修正は完璧だったはずだ!!なぜ…いったい何故!?!)」

妹紅は呆然とした表情のまま、吉影の背後を指差す。「それ…なんだ?」

吉影は振り返り、愕然とした。吉影を狙ってきた岩は、彼に命中しなかったことよって、彼の背後へと迫っていた狼型の妖怪を押し潰していた。普通なら奇跡に喜ぶところなのだろうが、この場合は不幸に他ならなかった。

【キラークイーン】は血飛沫を浴びていた。スタンド使いでなくても、巨漢の人型の存在を認識できるほど。

「（な、なんだとオツ！?!）」

妹紅を見る。彼女は知ってしまった。彼女に知られてしまった。自分が能力を持っていると。自分は嘘をついていたと。

「（どうする？どうすればいい？）」

【始末】するか？いや、容易く骨にされるだけだろうし、今は妖怪を倒さなければならぬ。

話し合い？そんな状況ではない。

無視して妖怪と戦う？そんなことをしても、彼女は納得しないだろう。

いったいどうするべきか……………、
っ！?!）」

ふつと吉影は彼女の背後に目を移した。目を見開く。

「ハッ！?!」

妹紅がふりかえったが、遅かった。突然発生したとす黒い霧が妹紅を飲み込んだ。

「何イ！?!」

キラークイーンの脚でバックジャンプし、霧から逃れる。霧の中から、肉が引き裂かれ、液体の迸る音が聞こえた。

「この霧 冗談だろう…?!」

霧が晴れると、そこには、喉を喰い千切られ、動かない妹紅の身体があった。

「そうだよ。お久しぶりだね。」

「やはりお前か…こいつらはお前の子分か？」

「ううん、違うよ。ただ『外来人がこの辺にいたよ。』って言うたら勝手にいうこと聞くようになっただけだよ。」

「成る程、私を消耗させてから襲うつもりか。とりあえず顔を見せてもらいたいんだが…?」

「やくだよ。あなたの念力の射程とか能力を観察するんだから。」

スピードはクソツタレ仗助の【クレイジー・ダイヤモンド】と互角、パワーはそれ以上かもしれないッ！！」

【キラークイーン】の脚を後ろに蹴り上げる。背後から飛び掛かってきた狼三頭が臍物をぶちまけて吹き飛び、樹木の幹に叩きつけられ、動かなくなった。

「（しかも【気配】にも敏感になっている。堪も冴えてきた……：そっういえば昨日通過した森の茸の胞子は魔法使いの力を高めるとか妹紅が言ってたな。これもその作用か？）」

【キラークイーン】の性能の向上を実感し、吉影はルーミアの居場所を探るべく辺りを見回す。

「うわあ、すごい でも残念、捨て駒はまだまだたくさんいるよ。」

「いい加減出て来たらどうだ？今ならまだ3分間痛め付けるだけで赦してやるが……」

「まっただよ。かくれんぼはちゃんと自分で探さなくちゃ。」

「…分かった。探して見つけ出して死なない程度に殺してやる。」

「お前、【スペルカードルール】で戦うつもりはあるか？」

「何言ってるの？外来人のくせに。【スペルカードルール】はあくまで幻想郷の住民のための制度。あなたには適用されることはないよ。」

「つまり、これは【ルール】に則った決闘ではないということだな。よかった、私が断然有利というわけだ。」

「……… 本当に何言ってるの？【スペルカードルール】なしに人間が妖怪に敵うはずが………」

「『【殺し合い】なら得意分野だ』、と言っているんだよ。」

吉影の瞳が、殺人鬼のそれに変わった。

「フツツ、面白い冗談だね。」

ルーミアとの会話が終わり、声のした方向からおおよその位置を探り出した吉影は、さらに彼女の居場所を絞り込む策を実行する。

「さて、コイツも強化されているか実験してみるか。」

【キラークイーン】が左拳を突きだす。

「『キラークイーン』第二の爆弾』、【シアーハートアタック】
！！」

手の甲からドクロを模した一台の小型戦車が発射された。

「目標はクソケダモノ共より離れた場所にいる人型の熱源だ。途中の敵は爆破しろ。さあ、捜せ！！」

【シアーハートアタック】が頭上を旋回しルーミアを探している間、近寄る妖怪の頭を潰して【爆弾】に変えて投げつけ、牽制する。

すぐに見付けたらしく、地面に降り、キャタピラでパワフルに土を掴み走り出した。

「コツチヲミロオ」

【シアーハートアタック】は地面の凹凸を利用して元氣よく妖怪の腹を突き破り、口に飛び込み、内側から爆殺していく。妖怪は何が起こったかも分からず、大混乱に陥っている。

「成る程、そこか。」

【シアーハートアタック】が向かって行った方向を見る。その先には特別巨大な樹木があった。

「【シアーハートアタック】、もういい。そいつを監視しながらコイツらを片付けてくれ。」

再び飛び掛かってきた妖怪をぶちのめしながら命令を与える。【シアーハートアタック】はそれに従い、吉影を囲む妖怪の群れに突っ込んで行った。たちまちの内に妖怪共は激減したが、妖怪はかなり近くまで迫って来るようになった。

「まずいな…爆発に巻き込まれる。仕方ない。」

【シアーハートアタック】を戻し、両手でラツシュを叩き込む。

「しばばばばばばばばばばッ！！」

妖怪共を叩き、潰し、蹴り、ぶっ飛ばす。【キラークイーン】は全身に血を浴び、もはや元のシヨッキングピンクの肌は見えない。

「むっ？」

飛んできた巨大岩を片手で粉碎する。破片が妖怪共の肉を穿ち、痛みを吠える。

「さて、そろそろいいか。」

吉影は先ほど【シアールハートアタック】が示した方向に向き直る。

妖怪は遠巻きに吉影を眺めるだけで、ただ震えている。

「そこにいるんだろ？出てこい。」

樹木の陰に呼び掛ける。

「うふふ、せうかい。」

ルーミアが陰から姿を現す。輝く金髪、紅い瞳、忘れもしない、その姿。

「あなた、本当に凄いなだね。これだけの数の妖怪を、弾幕も撃てないのに、たった一人で倒しちゃうなんて。」

ルーミアが可愛らしく、妖しく、不気味に笑う。

「でも、あなたも相当消耗しているはずよ。その状態で私と、残りの妖怪に勝てるかな？」

吉影はただ彼女を睨み付けている。

「それに、あなたの念力の射程距離も形も分かったよ。形は人型、射程はだいたい2、3メートルつてところでしょ？爆発は私の位置が分かっていたのにできなかつたんだから、半径15メートルくらい

い
「
だな。」

「え？なにになに？何て言ったの？」

「【かくれんぼ】はお終いだな、と言ったんだ。私の勝ちでな。」

「…まあ、そうだけど、でも」

「じゃあ、罰ゲームだ。君はもうお終いだが、その前においたのことは謝ってもらわないと。」

とりあえずそこにひざまづいてもらおうかな。」

静かな、しかし冷たい声色で吉影は語りかける。

本気の自分が人間ごときに負けるわけがない。そう考えていたルーミアには、彼の言葉は思い上がりも甚だしい只の世迷い言か新手の

ジヨークに聞こえたのだろう。

「フフツ、そんなこと言つて……」

クスクスと笑い、彼女が口を開いた時、

「ひざまづけッ！！」

ドグオオオオオオオオオオ！！

吉影の怒号が響いた瞬間、二人を囲んでいた妖怪が爆炎と共に吹き飛んだ。それと同時に、

「えっ……………っ？」

ルーミアがくずおれる。立ち上がるうと足に力を入れようとするが、意に反して全く動かない。恐る恐る自分の足を見た。

「きゃあああああああああ！！！」

彼女の両足はズタズタに崩れていた。

「先ほど飛んできた岩は【キラークイーン】が爆弾に変えてから打ち砕いた。

小娘、貴様の隠れている樹のそばにはらまいておいた破片が爆発したのだ。」

両足を破壊され悲鳴を上げるルーミアに、吉影はゆっくりとした、だが確固たる足取りで歩み寄つて行く。

「あつ、ああつ！足が！私の足が……」

「……………この世界に流れ着く前、私が住んでいた町では、年に一回救急講習が開かれていたんだが……」

「いつ、痛い！痛い！！痛い！！！！ああつ、足、足が……」

「君と戦った後、真剣に受けておくんだったと後悔したよ……技術を身につけなくっちゃあな……」

でもああいうのに通っている連中ってのはどーなんだろうな？一週間も歯磨きしてないヤツが、人形相手に人口呼吸練習したり、それを使い回したりしてるのかな……？」

「ああつ、立てない！立ち上がれない」

「【キラークイーン】に抱えられて樹の上を移動していた時が一番応急処置の必要性を実感したよ……………抉れた傷口が開いてね……………立

轟いた！

「きゃあああああああああ！！！」

「グオオオオオオオ！！！！」

金切り声と共に闇が晴れていく。

やがて完全に闇は消え失せ、気絶した妖怪と、宙に浮きながら目を回し、耳を押さえて呻いているルーミアの姿が見えた。

「爆風を受けた時、最も傷付きやすいのは眼球と鼓膜だそうだ。初めてこのような使い方をしたが……上手くいったようだな……」

耳を塞いでいた手を下ろし、【キラークイーン】の脚で跳躍する。

「うつつ、耳が…頭が…ジンジンするう…」

昏倒寸前の彼女の前に、突然吉影が現れる。

「あつ」

ドグシュ！！

【キラークイーン】の拳が、ルーミアを貫いた。

「がはっ…！？」

ぶっ飛ばされ、樹の幹に背中を打ち付ける。骨がへし折れる音が聞こえた。

「ぐあつ…！！」

地面に倒れ込み、そのまま顔を伏せる。腹から流れ出した大量の血液が、巨木が根を張る土に染み渡り、紅葉の落ち葉のように地面を赤黒く染め上げる。

ルーミアは苦しげに呻き、力を振り絞ってどうにか顔を上げた。

吉影の姿は無かった。ルーミアが何故彼はすぐに姿を現さないのか訝しく思った時、

「え…？」

突然彼女の周りが陰った。上を見上げる。

妖怪の死体がグングンと迫ってきた。

「なっ……!?!」

ドグシャアアアア

ルーミアの体が死体の下敷きになった。

吉影はさらに5体10体20体と、死体を投げ飛ばす。瞬く間に死体の山が築かれ、破れた腹から飛び出した内蔵や頭部から転げ落ちた脳髓や眼球が周囲に土手を築き上げる。

「さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっていいるだろう。」

手をパンパンとはたきながら、自らが築いた死体の山を眺めて呟く。「だが、まだしぶとく生きているかもしれない。确实なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するでしょう。」

吉影は油断なく死体の山に歩み寄って行った。

吉影から見て死体の山の反対側に当たる場所。狼の妖怪の死体が、二度と光を見ることがない目を見開いていた。何も動くものはない。狼の頭が、ピクリと動いた。ゆっくりと顎を開いていく。

やがて顎がはずれるほど大きく開き、中から血と臓物にまみれた物体が顔を覗かせた。

それは周囲をキョロキョロと確認し、吉影の姿がないことを確かめると、おそろおそろ死体から這い出てきた。

うっ、と呻いて傷を押さえる。腹にぽっかりと開いた穴が痛む。

「これだけやったんだから、私が生きているなんて夢にも思っていないだろうなあ……」

そのままいなくなってくれれば、助かるんだけど……」

ルーミアは願いながら、這いずってこの場から離れようとした。しかしそのとき、最悪の知らせが敵によってもたらされた。「さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっているだろう。」

だが、まだしぶとく生きているかもしれない。確実なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するとしてよう。」

ゾオツ

ルーミアは死体の山の陰で戦慄した。

あの外来人の発する気配が、其処らの妖怪なんかより遙かに冷たく自分の造りだす闇よりどす黒い殺気が、彼女を襲った。

「(なに…なんなの…この人間？霊夢や魔理沙とは比べ物にならない…！二人より遙かに弱いはずなのに…！)」

彼女は彼に見つからないように身を縮め、必死に震えを抑えつけて、這いずって逃げようとした。しかし……

「何処に行こうというんだね？」

「ひいつ！？」

背後から掛けられた声に縮みあがる。駄目だと分かっているのに、逆らえず振り返ってしまった。

そこには吉良吉影

殺人鬼が、全身血みどろの姿で、

彼女を見下ろしている姿があった。

「あ…ああ…、

あああつ…！」

ルーミアが声にならない悲鳴を上げる。目が涙で滲む。震えが止まらない。身体がいうことを聞かない。「こ、来ないで…！お願い！た、助け

！た、助け
涙声で赦しを請おうとした時、吉影は世間話でもするように彼女に

語りかけた。

「『傷薬』…持ってるかね？『消毒液』でもいいが？」

「…え…………？」

「ん？持っているかと聞いているんだよ。『傷薬』か『消毒液』持ってるかね？」

唐突すぎる質問に戸惑いながらも答える。

「う、ううん、持っていない……………なんのこ…と？」

「持っていない…か……………」

「じゃあ私のを使いたまえ。」

吉影が、慧音に渡された傷薬の瓶を取り出し、ルーミアに差し出す。訝しげにそれを見るルーミア。

彼女が瓶を凝視している前で、吉影は瓶の蓋を開け、指先で中の塗り薬を掬い

ビツ

ルーミアの両目目掛けて、塗り薬を飛ばした。

「きゃあああああああああ！？」

激痛のあまり泣き声を上げ、うずくまるルーミア。「強盗とかの人質は目隠しをされると、とてつもない恐怖感に襲われ、パニックに陥るそうだ…宵闇の妖怪には効かないかと思ったが、効果てきめんだな。」

「うつつ、目が、目があ…、痛い…見えない……………」

激しく目を擦るが、逆に目を傷つけるだけだ。

「私は君に近づかない。もう前のように油断してノコノコ近づいて足を潰されるのはゴメンだ……………」

だから……………」

小石を拾い上げ、【キラークイーン】にいつでもルーミアを狙撃できるように構えさせる。

「君から少し離れた位置から、狙撃することにする。だが…いくらか精密動作性が上がったとはいえ、この距離でこんな不細工な小石を命中させる自信はないな……………」

もう少し近寄ってからじつくりと狙い撃ちするでしょう……」

苦しげにうづくまるルーミアに、少しずつ歩み寄る吉影。

ルーミアは這いずって逃げようとせせず、ただ泣いていた。

吉影は隙を見せずに、慎重に足を進める。

「一歩……二歩……、小石を確実にぶち込める射程距離まであと一歩まで迫った時……」

「……………フフツ……」

吉影がハツと足を止める。【キラークイーン】の目でルーミアを凝視し、観察する。

いつでも小石を撃ち出せるよう、【キラークイーン】に照準を定めさせる。

「……?」

「フフツ、アハハ……クスクス……………」

ルーミアが上半身をゆっくりと起こす。吉影の方に向き直り、見えない目を強引にこじ開ける。涙が頬を伝う。

「ハハツ、フフツ、アハハハハハハハハハハツ……」

「……………」

吉影の身体に緊張が走る。拳を震わせ、目の前で可愛らしい声で不気味に笑う宵闇の妖怪を睨み付ける。

「キヤハハツハハハアハハアハハハハハハハハハハ……!!」

西部劇の早撃ちのように瞬時に狙いをルーミアの眉間に定め、発射しようとした瞬間!!

「ブラックアウトオオツツ!!」

ガバツと飛び起き、渾身の声で叫ぶ!闇が爆風のように拡散し、吉川を呑み込もうと迫る!!

「遅いわアツ!!」

【キラークイーン】の親指が小石を弾き出す!その瞬間!!
ビュオオオオオンツ!

「なにイツ!?!」

背後から襲い掛かってきた鳥妖怪を左拳で殴り飛ばす。

「クソッ！まだ残っていたのかッ!？」

その一瞬の動作のために、【キラークイーン】の手元が、僅かにずれる。

「なあッ、しまった!!」

もう遅い。すでに放たれた小石は闇に呑まれてしまった。一瞬後、吉影も闇に呑み込まれる。

小石がルーミアを貫く音が聴こえてくることは、
なかった。

第三話 復讐と露見 前編（後書き）

御覧いただきありがとうございます。

この話は当時、ようやく書きたいバトルシーンにとりかかることができたので非常に楽しく書いていました。そのせいでいくつか設定に矛盾ができて、修正する羽目になってしまったのですが・・・次回以降はバトルが基本になってまいります。中盤以降になるほど温めていたネタを一気に放出しているので楽しんでいただけるかと思えます。

そこからは大変「ジョジョらしい」能力バトルが繰り広げられているので、「なんだ、ツマンネーな」と思われている方、どうか第？話まで我慢していただくようお願いいたします。期待は裏切らないことを【約束】します！！

第四話 復讐と露見 後編（前書き）

少し遅くなりました。第四話 「復讐と露見 後編」、お楽しみください。

ガバツと飛び起き、渾身の声で叫ぶ！闇を爆風のように拡散させ、吉影を呑み込もうと肉迫させる！！

「遅いわアツ！！」

吉影の咆哮が闇の向こう側から聞こえる。だが、ルーミアは動こうとしなかった。彼女は、ただ待っていたのだ。彼が狙いを外す、その時を。

「（さあッ！そいつを串刺しにしろ！！）」

鳥妖怪が吉影の背目掛けて突っ込む音、そいつが返り討ちにされる音、

そして

小石が、弾幕の何倍もの速さで発射される

音。

「（お願い…！どうか…！どうか外れて…！）」
彼女の願いは、通じた。

小石が彼女の右の頬を掠め、髪の間を通り抜け、過ぎ去っていった。

「（やった…！勝った…！私の勝ちよ…！）」

心の底から歓喜の声をあげる。腹の底から笑う。恐怖からの解放に復讐への喜びが合わさって無上の歓喜になる。

「キヤハハハハッ！！惜しかったね、あなたが油断してバカみたいに一人でくっちゃべってたからこうなったのよ！！」

あなたの敗因はただひとつッ！！その身の丈不釣り合いな過大評価よッ！！

さあ、覚悟なさい！！明けない闇の中でガタガタ震えて命乞いする心の準備はオーケー！？

あなたには生まれてきたことを後悔しながら死んでもらうわッ！！

さあ、歯を食い縛りなさいッ！！妖怪をなめたらどうなるか、その魂の奥底まで刻み込んであげるッ！！

さあ、喰らえ

「

ドグオオオオッ！！

「……………え？」

フツと全身から力が抜ける。バタリと仰向けに倒れる。何もしていないのに、闇が勝手に晴れていく。森の様子が、徐々にはつきりと見えてくる。

やがて完全に闇は取り払われ、彼女の顔に柔らかな日の光が差した。

「…？」

気だるげに拒否する身体に鞭をあて、顎をひく。合わない焦点をなんとか合わせ…

「…え？」

彼女の腹には、さらに大きな穴が口を開いていた。ぐちゃぐちゃになった内臓が顔を覗かせ、血はもはや勢いを無くしてただ静かに流れ出るだけだった。

「『キラークイーン』第一の爆弾』…君の腹を貫いたとき、爆弾に変えた小石をすでに仕込んでおいたのだよ……………」

吉良吉影が静かに、冷然と呟く。「キラークイーン」が鳥妖怪の死体を掴み上げ、嘴を引き抜く。嘴は音もなく爆破され、死体も塵になり消滅した。

「私の『キラークイーン』の指先は、どんなものも爆弾に変え、髪の毛一本残さない。じきに君もこうなる。」

「ひいつ…！？」

唯一動かせる腕で身体を起こそうとするが、力が抜け、片肘が折れる。そのまま横に転がり、うつ伏せになった。

ダメージが大きすぎて、もはや宙に浮くことすらかなわない。

「あ……あ……あ……！」
歩み寄る吉影。

「やめてッ……いやッ……！助けて、死にたく……ない……！！」
這いずり、逃れようとするルーミア。

「助けて……、お願い……！もう……人間……食べない……から……！」
吉影は無言で次の小石を構える。

「本当……よ……、もう……絶対……人間食べたり……しないか……ら……！！何
でも素直……に……いうこと聞……聞くから……、ッ……！」
ゴフツと咳き込むと、血が吹き出した。

血と涙と恐怖で喉が詰まる。声が出ない。息も絶え絶えだ。涙が溢れる。止めどなく溢れる。頬を伝い、土を湿らせる。

そんな虫の息の彼女を、吉影はただ冷酷に見下ろす。当たり前だ。

【殺人鬼】が、妖怪を殺すのに躊躇するだろうか？これから憎悪を込めて殺す相手に、存分にいたぶって殺す相手に、一片の同情でも持ち合わせているだろうか？

【キラークイーン】がルーミアの左肩に狙いを定める。

「人に【頼み事】をする時は、その人に尻を向けて遠ざかれ、と学校で教えているのか？」
ビシッ！

小石がルーミアの左肩を貫通した。

「あぐッ……！」

「正解は歌にもある通り、『お化けにや学校も 試験も何にも無い』だ。覚えておけ。」

ドスッ！

「があッ……！」

「さて、話の続きだ。私の【能力】を知ってしまった君は、生きていてもらっては困る。

また、私が君を始末したことも露見してしまつては困る。

よつて君は『わたしが手を下したと発覚しない手段で』死ななくちゃならない。私の言つてること、分かるな？」

バシッ！

「ぐあッ……」

「そこで、私はさっきの鳥妖怪と同じく、君を塵も残さず消滅させようと考えた。だが、私はそこまで血も涙もないわけではない……」

……」

バスッ！

「いッ……？」

「死ぬその瞬間までは、せめて君の姿のままに殺してやろう。嬉しいだろうッ？ええッ？！喜びたまえ。」

だが、その対価として……、おっと、だめ押しにもう一発。」

グシュッ！

「あッ……！」

バタンッ

両肩と両肘を貫通され、背中に小石爆弾を埋め込まれたルーミアは、ついに這いずることすらできず、地面に突っ伏した。血と涙に濡れた顔は土にまみれる。

「これから君をなぶり殺すからな……」

君のような、どう見ても十歳未満のクソチビに、辛酸を舐めさせられるなどという、『赤っ恥のコキッ恥』をかかされたんだ……じゃなければこの気分がおさまらん……」

吉影は、ゆっくりと、悠然と、ルーミアのもとへと足を進める。【キラークイーン】の目で、もう身動きひとつできないことを確認しながら。

「初めて出会った時は【君】に『私のもとに来てくれ』と言ったが……こうやってよく見ると実に醜いな、【君】は。」元【彼女】候補を見下ろし、侮辱するように言い放つ。

「爪は無造作に伸びきっている。手入れがなされていない。しかも爪の間に死肉がこびり付いている。まったくもって醜悪だ。」

吉影がキラークイーンの脚を上げ、ルーミアの右手を踏み潰そうとした。その時……

「うっ……」

ルーミアが、呻いた。吉影はビクツと足を下ろし、後ずさる。右手のスイッチに親指を添え、いつでも爆破できるように身構える。だが……

「……………んっ……………」

…くっ…うっ…うっ…う……

…うえっ…えっ…うええっ……」

ルーミアは、ただ、咽び泣いていた。逃れようのない死の運命に、絶望して。彼女の創る漆黒の闇より暗く、全てを呑み込み隠す、深く冷たい絶望に包まれて。

「泣くな、馬鹿者。」

興を削がれた吉影は舌打ちと共に吐き捨てると、振り返り、『本命』のもとへと向かう。

彼女は、ルーミアから十メートルほど離れたところに倒れていた。

「私は、『彼女』を二人以上作らない。」

吉影は、もう血も流れ出ない妹紅の死体のもとへと足を運ぶ。

「何故なら、『彼女』が二人以上いると、どちらも平等に愛することに無駄な神経を使わなければならないからだ。だから私はいつも右手だけ連れて帰るし、匂ってくるまでは他の女性に手出しはしない。」

妹紅の死体の傍に立ち、見下ろして囁く。

「さあ、『君』を迎え入れるために、元『彼女』とは手を切った。

喜んで私のもとに来てくれるな？」

しゃがみ、まだ温かい右手を優しく持ち上げ、唇を寄せて語りかける。

「『君』の元持ち主は、私の秘密を知ってしまった。悲しいだろうが、これも二人の幸せのためだ……」

大丈夫、ちゃんと火葬してあげるさ……、いや、爆葬かな……？」

ふつとため息をつき、キラークイーンの腕を振り上げる。

「さあッ！今ッ！私のもとにッ！！」

【キラークイーン】の手刀がまさに振り下ろされる瞬間ッ！！

「ぐおあッ！！」

吉影が妹紅の手から手を放す。

「あ、熱いッ！！なんだ！？どういうことだ！？脈はなかったはず！！」

ふと顔を上げると、妹紅の身体から煙が上がっていた。

「ま、まさかこれがッ…！？」

もしこれが妹紅の言っていたことなら、一刻も早くこの場から離れねばならない。だが、すでに妹紅は焰を上げて燃え始めていた。

「（まずいッ！！彼女の遺言がこれを指していたなら、今すぐ離れないと吹き飛ばされるッ！！）」

「【キラークイーン】！！」

吉影は後ろに高跳びの背面飛びのように飛び、キラークイーンの腹部のスペースに飛び込んだ。キラークイーンがシャッターを閉め、大きくバツクジャンプしたその時！！

ドグオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

妹紅の死体が爆発し、爆炎が襲い掛かってきた！！

それは【キラークイーン】の爆発とは比較しようもないほどの威力で迫り来る！！

「（まずい！！、マズ過ぎるッ！！このままでは、跡形もなく燃え尽きてしまう！！）」

伊達に爆弾使つてない彼は、こんなもの直撃したら火傷じゃ済まないことも、このままでは爆炎に呑み込まれてしまうことも分かっていた。

「（あれだッ！あれをやるしかない！！）」

「【キラークイーン】！爆弾を解除しろオッ！！」

先程ルーミアの背中に撃ち込んだ爆弾を解除し、持っていた小石を爆弾に変える。

「うおおおおおおおおお〜ッ!!」

小石を爆発させ、爆風で後ろにぶっ飛ぶ。指が裂け、血が噴き出す。だが、このおかげで爆炎から逃れることに成功した。

「ぐああッ!?!」

樹木の幹に打ち付けられたが、キラークイーンがクッションになつてくれたので、ダメージは少なくて済んだ。

「な…なんだ…これ…は…!?!」

ズルズルと木の根元に座り込んだ吉影の目の前では、人外魔境が展開されていた。森は半径数十メートルが消し飛び、爆炎が渦を巻いていた。

その地獄の業火の竜巻は中央に圧縮されて、やがて消滅する。煙がもうもうと立ち込める。何も見えない。

「ゲホッゲホッ…」

咳き込みながらもキラークイーンの目で警戒していると、徐々に煙は晴れていき…

「じょ…冗談だろう…?」

掠り傷ひとつなく、平然と立っている妹紅の姿があった。

「う〜ん、気絶してから絶命するまで時間かかってしまったようだな…」

茫然としている吉影の視線の先で、妹紅は十時間バッチリ眠った後にスッキリお目覚めしたかのようにあくびをして、辺りをキョロキョロと見回し、

「うわっ…コイツら、もしかしてみんな川尻がやったのか…?」

妖怪の死体の山を発見し、吉影のように茫然とした。

「(ま、マズイ…どうすればいい!?!)」

吉影が必死にこの大ピンチを切り抜ける方法を考え始めた二秒後、

「おお、川尻!無事だったか!?!」

あっさりと妹紅に見付かった。

「あ、ああ、妹紅こそ何故…」

「あんだ、さっきも訊いたけど、そいつはなん

だい？」

しかもあまりに慌てていたため、血飛沫を浴びたキラークイーンを引っ込めることを忘れていた。ハツと気付いたが、時すでに時間切れ、妹紅は吉影の目の前まで歩み寄り、ジロジロとキラークイーンを観察した。

「慧音からはお前が何か能力を持つてるなんて聞いてないが…彼女にも黙っていたのか？」

妹紅が疑惑の目を彼に向ける。当たり前だ、無力だと思って護ってやっていた者が、本当は滅茶苦茶な強さをもっていたのだから。

「いや、違うんだ、これは…」

「じゃあそいつはなんだ？この肥やしの山はなんだ？どうして隠していたんだ？」

もはや言い訳はできない。絶体絶命の大ピンチ。

そこで問題だ！この絶望的な状況をどうやって切り抜けるか？

三択 ひとつだけ選びなさい

答え？天才の吉影は突如打開策がひらめく

答え？困ったときはとりあえずSATSU GAI

答え？大人しく白状しかない。現実是非情である。

「（？はあり得ない、？は逆に殺されかねない…やはり？…か…だが、ただでは白状しない…！）」

吉影はふっ、と悲しげに笑い、空を見上げると、独り言のように呟いた。

「君には…わからないだろうな、自分の存在が

【非常識】や【迷信】である者の気持ちは……………」

妹紅がハツ、と息を飲むのを視界の隅に確認し、吉影は続ける。

「わたしは自分のこの【キラークイーン】を見る時、いつも思い出す……………」

子供の頃、小学校 【こちら】で言う寺子屋のことだが……………」

…そこでわたしの担任教師と母が話しているのを、【コイツ】で盗み聞きした。

『川尻さん、お宅の浩作くんは友達を全く作ろうとしません。そう、嫌われているというより全く人とうちとけないのです。担任教師としてとても心配です。』
母はこう答えた。

『それが…』

恥ずかしいことですが…親である…私にも…なにが原因なのか…』

子供の時から思っていた。町に住んでいるとそれはたくさんの人と出会う。しかし、普通の人たちは一生で真に気持ちがかよい合う人がいたい何人いるのだろうか？？小学校のクラスの人、くんのアドレス帳は友人の名前と電話番号でいっぱいだ。50人ぐらいはいるのだろうか？100人ぐらいだろうか？

母には父がいる。父には母がいる。

『自分は違う。』

TVに出ている人とかロックスターはきつと何万人といるんだろうな。

『自分は違う。』

『自分にはきつと一生誰ひとりとして現れないだろう。』

『なぜなら、この【キラークイーン】が見える友達は誰もいないのだから…』

見えない人間と真に気持ちがかよう筈がない。』

…だから、実を言うと、少し嬉しかった…あのルーミアという少女が、わたしのように【能力】を使った時は…

…でも、彼女もわたしを認めてくれなかった。わたしを人間だと、外人人だと言って。だから、わたしはここでも秘密にしておこうと思ったんだ。だれもわたしを、わたしのことを、理解してくれることは…

「違う！！」

吉影は妹紅の張り上げた大声に驚き、彼女に目を向けた。

「違う、違うんだ！！あなたを理解してくれる人はきつといる！

いや、わ、私は分かる、分かるんだ、あなたの気持ちが……」

「分かる？フツッ、気休めなら結構だ。君はこの【非常識】の世界で暮らしているじゃないか。それなのに……」

「いや、私は……、私は外の世界で生まれた。今から千年以上前に……」

「……なんだって……？千年……だと……？」

「そうだ、私は元々、普通の人間だった。それがあある時、感情に身を任せてしまつて……」

それから、各地を転々として生きてきた。この外見でまったく成長しない私を、人々は不気味がつて、長居はできなかつた……

そうしているうちに、この幻想の地にたどり着いた。驚いたよ、見たこともない化け物が、群れをなして襲つてくるもんだから……

でも、この幻想郷にも、私のように不死身の者は居なかつた……私は人も妖怪も見境なく襲つていった。憎かつたんだ、私を置いて変化していくこの世が……

次第に生きる気力もなくして、ただ死んでいないだけの無為な暮らしをおくっていた。そんな時……」

死人のような生氣のない目で淡々と話していた妹紅の目に、光が灯つた。

「……慧音に出会つたんだ。」

彼女も私のように迫害を受けていた。でも、彼女は諦めなかつた。

どれだけ避けられても、どれだけ罵声を浴びせられても、人間に認められようとしていた……そんな彼女に、私は言つたんだ、『なんでそんなことをしてるんだ？認められるわけがないのに、なんで力も使わず、黙つてやられてるんだ？』つてな。そしたら彼女は言うんだ、『なら試しに君に認めてもらおうかな？』と。私は鼻で笑つたが、それから毎日私の家に来てくれてな。手料理を作つてくれたり、服を繕つてくれたりした。私は冷たくあしらつたが、内心とても嬉しかつた。私を本気で理解しようとしてくれて……

それからほどなく、私達は親友になつた。今では私達を蔑む人間は

いない。慧音は念願の教師をやってるし、私は竹林の医者への案内をやっている。案内してあげると、みんな感謝してくれるんだ。『ありがとう、これで子供は助かる』ってな。だから今では、この肉体を憎んではないよ。生きているのは素晴らしいことだと思えるようになった。慧音のお陰だ…

あつ、アイツも加えるべきかな…？」

「アイツ？」

「ああ、竹林の医者小屋敷にいるやつでな、私の宿敵だよ。そいつも不死身でなあ、よく殺し合っているんだ。私と本気で殺り合えるのは、アイツだけだから…」

「…殺し合いで生きている実感がわくのか…まったくもって【非常識】だな…」

「ハハツ、そうだろう？だから、川尻、あんたも怖れることはないんだ、きつと慧音も人里の人間も理解してくれるだろうさ。」

「フツツ、そうかもな。だが頼む、誰にも言わないでくれ。いつかこの世界を去る前に、人々と打ち解けてから自分の口で話したい。

慧音には帰ってから言うことにするよ。」

「そうかい、分かってくれたんだな。」

「ああ、よく考えたら、君らも能力を持っているのに、怖れる必要なんてなかった。まったく、自分が不甲斐ないな。」

「そんなことないよ。人がトラウマってものに抗うのは難しいからな。」

妹紅の目には、もう疑惑の色は見る影もなかった。

「ところで、そんな血まみれの格好で神社に行く気かい？」

吉影が自分の服に目を落とすと、それは猟奇殺人鬼が（まあ実際そうだが）一遊びした後のようだった。しかし彼は狼狽えたりしない。

「ああ、それなら大丈夫だ。」

【キラークイーン】を引っ込める。キラークイーンに付いていた血や臓物がボタボタと落ちる。

吉影は大して大きな素振りもせず、彼の最も信頼する相棒の名を呼んだ。

「【キラークイーン】！」

【キラークイーン】が彼の身体から飛び出す。同時に、彼の服や顔に付いていた血肉が【キラークイーン】の身体に押し出されてバラバラと落ち、一瞬で普段の綺麗な姿に戻った。

「おお、便利だなあ……」

妹紅が感心して呟く。

「ところで、ルーミアはどうしたんだ？」

ハツと吉影は彼女の倒れていた場所を見た。血溜まりは焼けてよく見ないと分からないようになっていたが、そこに彼女の死体はなかった。跡形もなく蒸発してしまったのかと思っただが、どうやら違わらしかった。そこから離れた場所に、小さな血溜まりができていた。さらにそこから点々と血痕が森の中へと続いていた。

「さっきの爆発で吹き飛んで逃げて行ったようだ。」

「ああ、そのようだな。まあこの程度の出血では死ぬことはないだろう。」

ルーミアがその前にどれほど出血していたかを知らない妹紅が呑気にいう。

「（よし、とりあえず、ルーミアを半殺しにしたことはばれていない……」

息の根をとめることはできなかったが、あれだけ痛めつけたのだからもうわたしに喧嘩を売るようなことはないだろう。妹紅もなんとか抑えられた……あとは慧音だが、能力を知らせないでいたほうがむしろ能力を使ってしまったとき面倒なことになる……切り札を見せてしまうのは不安だが、問題を抱えたまま生活を送るよりは教えたほうが良いかもしれない。」

内心ほくそえんでいる吉影の目で、妹紅は背を向け中腰になった。

「さあ、予定よりだいぶ遅れてしまった。早く乗ってくれ。」

「あ、ああ、そうだな。分かった。」

吉影が妹紅におぶさると、

「さあて、ぶっ飛ばして行くよ!!しっかり掴まりな!!」

「よし、さっきのようにはいかないからな!!」

「ハハツ、覚悟しなよ!」

木々の枝をぶち折って、日がやや西に傾き始めた空へと飛び出して行った。

二人は気付かなかった。二人を見つめる二つの眼に。その智謀に富んだ狡猾そうな双眸に。

その瞳の持ち主はニヤニヤと期待に満ちた薄笑いを浮かべ、

「フフフ、特ダネの匂いがプンプンしますね…。」

記者として胸が高鳴らずにはいられませんよ……。」

小さくなっていく二人の後ろ姿に、シャッターをきった。

「死体のない亡霊……!?!?」

「ええ、そうです。外の幽霊や亡霊には詳しくありませんが、彼には死体とのリンクの反応はありません。」

「…亡霊ということは、周囲の生き物に害を与える可能性は…」

「その心配はありません。彼の精神は比較的安定していますし、幻想郷の環境と適応しているため、害を与えることはないでしょう。」

ただ……」

「ただ……？」

「亡霊に死体が無いなんてケースは専門外なので師匠に直接診断していただかないと何とも言えないんですが、もし彼が

」

生、先生

「先生、どうしたの？もう答えを書いたよ？」
ハツと慧音は我に返る。

「ああ、すまなかった、3日前の歴史編纂の疲れが残っているようだ。」

慧音は誤魔化したがる、その時生徒の一人がニヤリと笑ってからかった。

「先生、もしかして、あの外来人のこと考えてた？」

「うっ！！」

ビクツと体を震わせた慧音の様子を見て、やはり凶星かと生徒達はニヤニヤしながら追い打ちをかける。

「ねえ、あの外来人とはどこまでいったの？」

「あつ、もしかしてもう【お楽しみ】……」

「ああ、そのせいで寝不足なんだね！」

慧音は生徒達の囁し立てに顔を真っ赤にして、

「だあああ……！静かにしろ……！今日の授業はここまで……！早く帰ってお母さんの手伝いをするんだ……！」

「わあ……先生が怒った……！！」

生徒達はキヤツキヤツと笑いながらバタバタと教室を出ていった。

「ふう〜、まったく…。」

慧音は一人ため息をついた。

「しかし、心配だな…」

慧音は窓から日がかなり西に傾いた空を見上げた。

「私のしたことは、本当に、正しかったのだから…」

慧音は再び、深い溜め息をついた

第四話 復讐と露見 後編（後書き）

御覧いただきありがとうございました。

ルーミアには損な役回りを演じてもらいましたが、いかがだったでしょうか。今後もこのような暴力的展開は続くので、無理だと思われる方は読むのを止めずることをお勧めいたします。

第五話 鉄拳交渉（前書き）

少し遅くなりましたが、第五話です。

なかなか納得のいく文章にすることができず、苦労しました。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www.w28.atwiki.jp/shinatumiki/page/1.html>】より転載。

第五話 鉄拳交渉

「で、その博霊霊夢って巫女はどんな人なんだね？」

「そうだな、けっこうあっさりした奴だけど、直情的な感じかな。」

「そうか……第一印象を良くするためには、やはり賽銭を入れたほうがいいだろうか？」

「ああ、大当たりだな。どうも金に困ってるらしくて、神社に来る奴にはよく賽銭を要求しているらしい。」

「うむ……慧音からもらった小遣いで足りるだろうか……？」

「それは大丈夫だろう。金に汚いとよく言われているけど、意外と異変解決とかは真面目にやってるし、実際ただの外来人相手に

能力持つてるけど とにかく露骨に金をせびるなんてことはないはずだ。」

二人は、博麗神社の石段を上っていた。さすがに妹紅の背に背負われて巫女の前に登場するのはバツが悪いので、吉影は自分の足でかなりの長さの石段を登っていた。以前の彼なら、ばてていたかもしれないが、何故かこの世界に来てからは【スタンド】以外に身体の調子も良かったので、楽に足が進む。

「ところで、博麗神社ってのは、なんの神様を祀っているんだね？」

「あゝそれがな……、よく分からないんだ。」

「……どういうことだ？」

「巫女本人も分かっていないらしいんだよ。」

彼に合わせて飛ばずに石段を上っている妹紅が、何でもないと風にならりと答えた。

「大丈夫なのか？」

「は？何が？」

「そんな巫女に結界の管理を任せて、不安じゃないか？」

「うーん、結界の管理に神様は関係ないし、それで困ることはないから別に。」

「…なるほど、幻想郷では常識にとらわれてはいけないんだな。」

「まあ、少なくとも外の常識にはな。それと、少し前に異変起こした外来人があなたと同じこと言ってたよ。」

「ふむ、外の世界出身の者は皆同じ感想を抱くようだ。」

「ただ、その外来人も風祝で神様二柱と一緒に神社ごと引越して来たんだけど。」

「……分かった、さっきの発言は撤回しよう、外の常識が間違っているんだと。」

「ははっ、そんなこと言ったら外に帰った時に苦労するんじゃないか？」

「わたしはもとから【非常識】だ。」

「なるほど。」

しばらくすると、鳥居が見えてきた。石段を上りきると、目の前には小さめながらもなかなか荘厳な神社があった。

そして

「よう、霊夢、景気はどうだ？」

「…相変わらずよ。」

箒で境内を掃除している少女の姿があった。腋を強調したデザインの服にどうやって腕に引っ付いているのか分からない裾、赤いリボン。博麗霊夢だ。

「何よ、貴女が神社に来るなんて珍しい。何かうまい儲け話でもあるの？」

彼女は不機嫌そうにこちらを一瞥し

吉影に目を

とめた。

「ああ、その外来人のことね。」

「（服装で分かったか。これで話はスムーズに進む。あとはタイミングを見誤らずに取り入っていけば……）」

「そうだ。彼は外の世界から迷い込んで来てね、あなたなら彼を外

に帰してあげられるだろう？」

二人の目が吉影に向いたのを見計らって、吉影は話を始める。

「わたしは川尻浩作、3日前この世界に迷い込んだ者だ。博麗の巫女なら外に帰してくれると聞いたから来たが、頼めるだろうか。」

吉影はあえて敬語を使わずに言った。妹紅の話を聞いたかぎりでは、あまり堅苦しいことは嫌いそうだったからだ。

「何で私がそんなことしなきゃいけないのよ。」

霊夢は明らかに何か見返りを要求する素振りを見せている。

「（……さて、効果のほどは……）」
妹紅の話通り、金を欲しがっているようだ。
ならば……）」

彼は無言で霊夢の脇を通り過ぎ、賽銭箱へと足を進めた。背中に期待に満ちた視線を感じながら、ゆっくりと歩み寄り、賽銭箱の前で財布を取り出す。

「（……やはり相手の望む物を渡してやるべきだろうな。）」
財布の中身を、音がよく響くように賽銭箱の中に放り込んだ。
チャリンチャリンチャリン……

心地よい音が境内に響く。あえて【二拝二拍手一拝】をしなかったのは、この巫女はそんな上っ面だけの【形式】よりもストレートな【取引】のほうが好きだと見たからだ。

「（……さて、効果のほどは……）」
吉影が振り返ると、彼女はさっきの不機嫌さが嘘のように柔らかい笑顔を浮かべていた。

「あら、ありがとう。神様は礼儀正しい人には優しいわよ。」
霊夢はにこやかに話しかける。

「（……分かりやすい奴で良かった。）」
では、早速だが、外の世界に帰る方法を……」
吉影が二人のところに戻ってきた時だった。

「妹紅、悪いけど石段の下に下りて待っていてくれる？」
霊夢が妹紅にかなりつつけんどんに言い放った。

「……どういうことだ？私が居たら何か不都合なの

か？」

妹紅が霊夢の口調にややむっつとして言う。

「そうよ、これから私は彼と【交渉】するのよ。あなたが居たら一対一で【取引】ができないじゃない。分かったらさっさと下りてっ
て。」

「……………」

妹紅が霊夢を睨む。無言で彼女の考えを読み取るうとする。それを
霊夢は平然と見返す。しばしの間境内が穏やかではない空気に包ま
れる。吉影はやや焦りを感じながらその様子を見守っていたが、や
がて妹紅が引き下がり、吉影に『上手くやりな』とジエスチャーを
して鳥居をくぐって下りて行った。

境内に残ったのは、吉影と霊夢の二人となった。そして

「（…なんだ…？何故こいつはこれほどピリピリしている…？）」
妹紅のくぐった鳥居を見つめる霊夢の横顔からは、尋常じゃない覇
気が漏れ出していた。

「（…まずいな…、何時でも外に帰れるよう手筈を整えさせないと
いけないのに……」

…とにかく会話をしなければ…）」

吉影が話しかけるタイミングを窺っていた時だった。

「！？」

霊夢がサツと顔を吉影に向け、

「胸ポケット、右手首、左右スボンポケット、

襟の裏、懐のポケット、左靴……」

「ッ！？…！！」

彼は、不覚にも目の前の少女に驚きの表情を見せてしまった。何故
なら

「何故分かった…？透視能力の類いか…？それ
ともまさか心を読んだ…！？」

彼がいざというときのために服のあちこちに隠

しておいた金の在処をすべての中させてしまったからである。

「残念ながら違うわ。貴方が巫女を舐めすぎたってだけよ。」

霊夢が吉影にゆっくりと歩み寄る。

「心配しなくてもいいわよ、別にお金を隠していたからといって、【手数料】アップしたりはしないから。」

「（嘘だツ……こいつは、叩けば出ると分かったなら肉片になるまでぶん殴った後でローラーで絞り出すタイプ……わたしの長年の経験がそう告げているツ……）」

平穩無事な生活を望む彼は人との付き合いにも注意を払っていた。

その人物がどういった性格なのか、自分の平和を脅かす可能性はな
いか、気を付けて観察するうち、彼には相手の人格を読み取る能力
が備わっていた。

「だって、あなたを見た瞬間からそんな端金なんて御布施してもら
おうと考えていなかったから。」

吉影はスタンドを出したりせず、精神的に身構える。

「……………いくらだ？」

彼女は大したことじゃないとも言つように、サラリと言いつつ放った。

「なん…だと…!？」

3日ほど人里で慧音の買物に付き合ったり店の商品を見たりして
いた彼は、幻想郷の貨幣価値をだいたい把握していた。だから苦も
なく理解し、ストレートに衝撃を受けた。霊夢の要求した途方もな
い金額に。

「そんな…無茶だ！一体どうやってそんな金を……………」

「あら、やっぱりあなた巫女をなめているのね。」

「なめている…だって…?」

不条理な要求に沸き上がる怒りを懸命に抑えて彼は聞き返す。霊夢
は彼を頭の天辺から爪先まで眺め直し、

「さつきお金が入ってるって言った胸ポケット、腕時計が入ってるわね。さっさと出しなさい。」
有無を言わさぬ霊夢の口調に吉影は渋々腕時計を取り出す。

「言っておくが壊れてい」
「分かってるわよ。でも修理は出来そうだし、なんとなく高そうな雰囲気してるわ。魔法の森に香霖堂っていう外の世界の品物を扱ってる店があるから、そこで売ればそれなりの値段にはなるんじゃない？」

「……………は…？」
「それと、服も納めなさい。妖怪の間では流通しているけど、人里では洋服はあまり出回ってないのよ。価値は高くつくはずよ。あと何でしたっけ、【しゃーぺん】？だったかしら。墨が無くてものが書ける筆、あれも売り払いなさい。珍しいし便利だから、結構な足しになるはずだわ。」

あとアレ、【ケータイ】？外来人が耳に当てる箱、あれも奉納なさい。人里じゃなくて山の河童達に売るのが良いわ。あいつら【外】の機械に興味津々だから、目の色変えて涎垂らして飛び付くわよ。それと、【幻想入り】した時にまさか手ぶらだったなんて事はないわよね、カバンも中身と一緒に洗いざらい売りに出しなさい。それでも多分足りないでしょうけど、そのときは人里で職を見つけてあくせく労働していればいいわ。【外の世界】で暮らしていたんだから、働くの得意でしょう？」

「…ッ！…!？」
とんでもないことを口走る霊夢を、吉影は思わず怒りをあらわにして睨み付ける。

「身ぐるみ剥こうと言うのか…？このわたしを…!？」
まだ本気で殺気を滲ませてはいなかったからか、完全に吉影を軽く見ているのか、霊夢は彼の視線をさらりと受け流し、平然と言い放つ。

「ふん、どう受け取っても結構よ。でも、あなたを外に帰すのは私

にしかできないし、それを考えたら希少価値を含めてそのくらい当然ではないかしら？」

吉影は、はらわたの煮えたぎる思いだった。

「（こ、この金の亡者が……！間違った、こいつはわたしをなめきっているッ！ただの外来人だと思っ込んでるッ……！）」

彼は爆ぜんばかりに沸騰する憤怒を表に出さぬよう気をはりつめ、静かに懐から一枚の貨幣を取り出す。

「そうか……分かった……よく分かった……」
貨幣をコイントスをするように、握った右手の親指にのせた。

「ならば君の言うとおりにしなければ……」

【キラークイーン】の腕を出現させ、自身の腕と重複させる。

「（わたしの最も嫌いなことは……他人に注目されることだ。わたし自身について何か知られることだ。だがそれと同じくらい……ッ……）」

キラークイーンの指先が貨幣に触れる。貨幣は一切の動きを表さず、静かに変化する。

「君がそれほどまでに望むというのなら……」

賽銭箱に狙いを定める。怒りに震える右手を抑える。

「（コケにされるのがッ！大嫌いだッ……！）」

くれてやるッ！賽銭箱がはち切れんばかりの御布施をなッ……！

【キラークイーン】の親指が貨幣を賽銭箱にぶち込もうとした瞬間、ドオオオン……！！

「え……？」

吉影の身体が、宙を舞った。

「なんっ……！？ぐばあッ……！！」

額に強烈な衝撃を受け、頭を大きく後ろに反らし、彼は後ろにぶっ飛んで行った。空中できりもみに回転し飛ばされている最中、【キラークイーン】が賽銭箱に放り込むはずだった貨幣がクルクルと回ってあらぬ方へと飛んで行き、林に消えるのが見えた。

「あぐっ……！？」

石畳に叩き付けられ、吉影は呻いた。

「(な……何が起こった……!?何を…ツされた……!?)」
あちこち痛む身体を何とか動かし、霊夢の方を見ようと顔を上げた時だった。

「!!!?ツ」

彼の身長よりデカイ紅白陰陽玉が襲い掛かって来た。【キラークイーン】で防御する間も無く、陰陽玉は滅茶苦茶な威力で彼を巻き込み、彼を岩肌叩きつける。

陰陽玉と岩に挟み込まれ、吉影の肋骨がメキメキと軋むツ!

「ぐがああああッ!？」

ガクリとつぶせに崩れる吉影。弾幕と岩にぶつけられた全身がバラバラに砕けそうに痛む。力が入らない。強く胸を押し潰された息も絶え絶えだ。

「な、なにをつ……わたしはただ……お…御布施をしよう……」

吉影は苦痛に顔を歪めながらも、なんとか声を絞り出す。霊夢はそんな彼に歩み寄ろうともせずただ佇み悠然と見下ろす。

「……あなた、やっぱり巫女をなめきってるわね。仏の顔も三度という名言を知らないのかしら？」

彼女は何処から取り出したのか、お祓い棒を吉影に突き付け、怒気を籠めた声で言い放った。

「博麗神社の敷地内で、この私に喧嘩を売ろうだなんて、良い度胸してるわね。いいわ、買ってあげるわよ、その喧嘩。ただし、損害分はあなた持ちよ。しっかり請求してあげるわ。」

「(ま、マズい…このクソガキ、どうやったか知らないが、貨幣を爆弾に変えたことが分かっているツ…!いや、さっきからの何もかも分かっているかのような言動…!?神通力かなにか…!?)」

吉影は、この傷付いた身体でとにかく戦闘ができるように策を練る。

「(クソツ…身体が動かん………【キラークイーン】はなんとか動かせそうだが、回復を待つ間気を逸らさなければ………)」

吉影は苦しげに呻いて顔を上げ、霊夢に弱々しい視線を向ける。

「……なんの………こと…だ？私は喧嘩を売ったつもりなど………」

「しらばっくれるんじゃないわよ、なんか仕込んだんでしょ、さっきのお金に。あなたが普通の外来人じゃないことぐらい、一目見た瞬間から分かってたわよ。」

霊夢はかなりキレた様子だった。空気がピリピリと怒りを肌に伝える。

「（ぐっ……やはり完全にバレている………」

だが、この守銭奴も【スタンド使い】というわけではない……流石に我が【キラークイーン】の動きを完璧に読むことはできまいッ………」

「（ぐっ………」

だが、ちよつと待て……お前は博麗の巫女なんだろう…？【スペルカードルール】を定めた張本人が、いくら外来人相手とはいえ、【スペルカード】を使わずに戦ったらマズいんじゃないかね………」

今度はキツと霊夢を睨み付ける。会話をしながら、【キラークイーン】の調子確かめる。

「あら、あれは【スペルカード】宣言なんて必要ないわ。通常弾幕だから。」

「！？」
なにイ……？あれが………つ………通常弾幕…だ…と………！？」

吉影が驚愕の表情を作った。

「そうよ、だからスペカなんていらなのよ。まあ、そんなこと言ってもあなたがルール守って決闘するなんて思っただけ………」
霊夢が宙に浮かぶ。ゆっくりと、重力から解放されたように、静かに、フワリと浮かび上がる。

「さあ、どうかしら、身体の調子は？立ち上がれるかしら？戦闘ができるようになったかしら？」

「ッ!？」

(くそっ!バレていたのかッ!!)」

はっと顔を上げる吉影の様子を見て、霊夢が懐から一枚の【カード】を取り出した。

「じゃあ、戦えるようになったところで、トドメをさすわよ。せつかくだから、土産話にスペルカードをプレゼントしてあげるわ。外に帰ったら自慢しなさい
何十年も先の話でしょ

うけどねっ!」

スペルカードを頭上に掲げ、霊夢が宣言しようとした。だがその時…

「ククッ……………」

顔を伏せ、吉影が笑い声をもらした。

カードを掲げたまま、霊夢は吉影を睨む。

「ククッ……………クククッ…フフフ……………」

「……………なにが可笑しいのよ、ムカつくわね気持ち悪い。」

霊夢が苛ついた口調で吐き捨てる。

吉影はしばらく笑っていた。と思ったら震えながらもゆっくりと身体を起こし、顔を上げた。

「いや…いいことを聞いたと思ってね…本当に…すごくいいことを……………」

吉影がゆらりと立ち上がる。霊夢に面と向かって目を見据える。その目には、確かな希望が宿っていた。

「……………なによ、良いことって。さっきのが通常弾幕だったってことかしら?私の話が有益だったっていうんなら、情報料を払いなさい。」

「フフツ…惜しいな…その後の言葉だよ……………」

「……………?」

「どんなに強力な弾幕でも、【通常弾幕】なら【スペルカード】が不要だということだ……………ククククククッ…これでわたしも【ルール】に守られた身に危険が迫ることのない【決闘】ができるということが証明されたんだよ……………」

吉影は両足に力をこめ、しっかりと身体を支える。背筋を伸ばし、幻想郷の少女たちからすればかなりの長身となる175センチの肉体をしゃんと立たせる。

「さあ…これから【決闘】を始める前に、念のために先に言わせてもらおう……………」

次元大介の早打ちのように一瞬で【キラークイーン】を出現させるツ！！

「これは【通常弾幕】だツ！！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押すツ！

ドグオオオオオ！！

「きゃあッ！？」

耳をつんざく爆裂音が、先程貨幣がすつ飛んでいった方角から大音量で発せられた。流星の霊夢もこの音は堪えたようで、耳を押さえ、てフラフラとしている。

「『【キラークイーン】第1の爆弾』…………君の耳はしばらく使い物にならなくなった……………」

吉影は耳を塞いでいた【キラークイーン】の指を退けさせる。

「当たりだよ…大当たりだ…………さっきの貨幣は【キラークイーン】によって【爆弾】に変えておいた……………」

まあ、いくらわたしが喋っても今の君には何も聞こえないだろうがな……………」

彼は軽く手足を動かしてみる。

「（まだ鈍い痛みがあるが、少し我慢すれば戦うのに支障はなさそうだ…………【キラークイーン】も問題無く動かせる。）」

戦闘が可能であることを確認すると、吉影は足下の小石を拾い上げ、【キラークイーン】に射撃体勢をとらせる。

「本当は君にブチ込んでやりたいが…この世界の最重要人物を【始末】してしまつてはわたしの【平穩】に関わるし、何よりわたしが外に帰ることができなくなつてしまつ……………」

ならばここはひとつ……………」

【キラークイーン】に照準を賽銭箱に定めさせる。

「君が確実にわたしの要求を飲むよう、脅迫の材料を確保するとしてようッ！」

ビシィッ！！

【キラークイーン】の親指が、爆弾に変えられた小石を弾き発射した。

「さあッ！きさまの大切な賽銭箱は、わたしの掌の中だッ！」

小石は賽銭箱目掛けて一直線に飛んで行く。境内の上を空気を切り裂いて、正確な狙いで向かって行く。

だが

「な…ッ!?」

霊夢の横を通り抜けて行くはずだった小石は、空中で何かに衝突したように霊夢の手前で弾かれ、コツンという音をたてて石畳の上に落ちた。

「 夢符『二重結界』」

吉影がよく目を凝らすと、霊夢の周りは正方形の青白いオーラのようなもので囲まれていた。

「なんだと……ッ妖怪ですら昏倒寸前になる【爆音】を受けて、なお闘えるなどッ!?」

驚愕し、声をあげる吉影の様子を見て、霊夢は顔をしかめさせて独り言を呟いた。

「 ああ、耳が痛い…：なにも聞こえないわ…：」

…

ブンブンと頭を振り、意識をはっきりさせ、改めて吉影を見据える。

「あなた、どうやら『音を操る程度の能力』を持ってようね。それと、何か強力な【力】を操ることができる……：外の同業者？いや、まさかね……：精々【背後霊】ってどこかしら？」

「 ツ……………」

吉影はギリツと歯を噛み締める。

「（くそっ！スタンドのことまでッ！まだ小石を飛ばしただけだと

いづのに…）」

霊夢はさらに苛々とした様子で叫んだ。

「ああもっつ！自分の声も聞こえないなんて、話なんてできっこないわー！」

彼女はブンブンとお被い棒を振り回し、吉影に突き付ける。

「まっ、話なんかよりも、【こつち】の方が得意なんだけど。」

「ぐっ！」

「生意気な外来人に教えてあげないといけないわね！『挑発には弾幕』というここ（幻想郷）の礼儀作法をッ！授業料は高くつくわよー！」

彼女がお被い棒を一振りすると、

「なツツツ!?」

吉影は目を見開き驚愕した。彼の視界を埋め尽くしたのは、無数の陰陽弾と、隙間が見えないほど密集したばらまき弾だった。

「うおおおおオオオツッ！！【キラークイーン】！！！」

スタンドを完全に出現させ、拳の乱舞で迎え撃つ。巨大陰陽弾をへしゃげさせ、叩き潰し、ぶっ飛ばす。

だが

「ぬおオオオオあああッ！！！」

熊に群がる蜂の如く襲いかかる光弾が、【キラークイーン】の身体を打つ！巨大陰陽弾に手いっぱいにはそれらを弾くことなど到底できず、彼の身体は傷付いていくばかりだった。そして遂に

「ぐばあー！！！」

弾幕が顎に直撃し、派手にぶっ飛ばされる。さらに林の奥へと飛ばされ、背中から岩に激突する。

「ぐあッ！ウグゲ……………！」

彼は地面にへたり込みそうになるのをなんとかこらえ、顔をあげた。実際には立っているのがやっところか、立っていることすらできないほど弱っていたが、それでも彼は最後の力を振り絞り、沸き上

がる憤怒を隠さず霊夢を睨み付ける。

「やっぱり、飛べもしない外来人に弾幕勝負は無理だったかしら？」
まあ、最初からこうなるのは分かってたけど、と霊夢はただ宙に浮かび吉影を見下ろす。

「あなたが素直に言うこと聞いていたら怪我することなんてなかったのに、自業自得だわ。私まで耳がおかしくなっちゃったし。もし医者にかかることになったら治療費も請求するわよ。」

霊夢はやれやれと面倒くさそうに一方的に話すと、
「じゃあ、そういうことで宜しくね。さっさと人里に帰って就職するなりして、早いとこ稼いできなさい。」

くるりと背を向け、神社へと戻っていかうとした。その時……

「レイイレイイ ムツ!!」

背後からの怒号に、ハッと振り返る霊夢。そこには、巨大岩を頭上に抱えて鷹のように鋭い目で睨み付ける吉影の姿があった。

「なっ……!!」

「まだまだッ！まだ終わっていないアアアい!!」

吉影は自分が激突した岩を空中高く放り上げ、

「ウガアアアアア!!」

【キラークイーン】の脚で跳躍し岩に追い付くと、

「しばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばっ!!」

岩に渾身のラッシュを叩き込んだッ!! 岩は空中で粉碎され、散弾銃の弾丸のように神社へと降り注ぐ。

「くっ……!!」

霊夢が顔をしかめる。自分ならこの程度の瓦礫の雨を避けるのは簡単だが、神社はそうはいかない。

「避けられるならッ！避けてみるッ!!」

全身の傷と痛みなど気にもとめていない様子で、吉影は勝ち誇った声で叫んだ。着地し、霊夢に向かって全速力で駆け出す。

「くっ……！卑怯なことやってくれるわね……！大人げない……」

自分が月でやった所業を棚に上げ、霊夢は怒りを露にする。

「避けるつもりなんてないわっ！」

霊夢はフワリと真上に浮き上がり、

「叩き落とせばいいだけよ！」

懐から【スペルカード】を取り出し、頭上に掲げ宣言する。

「神霊『夢想封印』……！」

「むっ！？」

霊夢を中心に、先程の【通常弾幕】とは比べ物にならないほどの巨大な紅白陰陽弾が現れた。それらはギョルンギヤルンと高速回転し、岩の欠片をかき消していく。さらに、

「くそっ！」

その内の何発かは吉影に向かって来た。しかもどうやら彼の動きをホーミングしているらしく、彼の動きを正確に予測して狙ってくる。

「まだこんな強力な技を………！」

だがッ……！」

【キラークイーン】が右手のスイッチを押した。

ドグオオオオオオオオオオ

岩の破片が爆発し、爆炎が霊夢の『夢想封印』を破壊した。

「えっ、【爆発】」

霊夢が『目を見開き』、一瞬の怯みを見せた時、

「いつ……！？」

突然両目に痛みが走り、反射的に目を閉じる。

「痛っ……何よこれ……！？」

目をこする彼女を見て、吉影は口角を上げた。

「【第一の爆弾】ッ！自慢の弾幕でも塵は撃墜できまいッ………」

完全に視力を失った霊夢を見上げ、勝ち誇った笑いを上げる吉影。

「さらにこれでッ肉弾戦に持ち込める！我が【キラークイーン】のパワーとスピードに、目も見えずに太刀打ちできるはずがないッ……！」

【キラークイーン】の脚で跳躍し、霊夢の正面に現れ、勝利の声を上げる。

「勝った！！喰らえッ！！」

【キラークイーン】の拳が霊夢の脳天を狙う。

「しばっ！！」

拳が、振り下ろされた。

ドガアッ！

【キラークイーン】の拳が、少女の脳天を捉えた。

少なくとも、吉良吉影はそう思っていた。

だが

「え？」

勝利を確信していた彼は、顔面に重い衝撃を受け、顔を歪めた。

「えっ！？」

【キラークイーン】の振り下ろした腕は、お祓い棒に受け流され、

彼の顔面には霊夢の拳がめり込んでいた。

「えっ！？なん…ッ？はぐっ！？」

さらに腹に数発パンチを受け、吉影はまた空に叩き上げられる。

「（こ…このクソアマツ…まさか…【キラークイーン】のパワー

とスピードに勝ったというのかッ！？そんな…事が…ヤツは人間だ

ぞ…？しかも目も見えないというのに…そんな…馬鹿なことが…

！？）

錯乱し状況が理解できないまま、吉影は為す術無く宙を舞う。

「ハッ！？」

霊夢は既に彼の隣にいた。吉影は咄嗟に【キラークイーン】の腕で

ガードの構えをとった。

が、

「ぶげあああっ！！」

踵落としが腹部に叩き込まれた。彼の内臓に強烈な衝撃が与えられ、呼吸不能になる。

「(は…速すぎる…強すぎる！なんだ？承太郎の【スタープラチナ】とは違った感覚…まるで【重力】の束縛から解放されたように、【無限の加速】のごとき速さだ…！！)」

彼はガクリと首を落とし、そのまま仰向けに落下していった。

全身を襲う激痛に苛まれなっている間も、地面はグングン近付いて来る。気が遠くなりかけながらも、気力で意識を繋ぎ止め反射的に【キラークイーン】の腕で身を守った。

グシャツ！！

「ぐばあー！！」

境内の石畳に叩き付けられ、一瞬息が詰まる。

「ぐがっ！ゲホッ……………！！」

咳き込み、苦しげに呼吸をする。

「(……………あの守銭奴……………スタンドの攻撃を受け止め、わたしの【キラークイーン】を上回るスピードで……………)」

背中の中の痛みを押し、動けず仰向けに倒れている吉影の側に、霊夢がフワリと着地する。

「何度言われたら気が済むの？あなた、巫女をなめすぎよ。」

霊夢は倒れた吉影に向かって、お祓い棒を突き付けた。

「まだやるつもりなの？そんなに死に急いで何がしたいのかしら？」

「ッ……………く……………」

【キラークイーン】の手で石畳を引き剥がそうとしていた吉影は、息を飲み動きを止める。

「しょうがないわね。そんなになっても闘いたいのなら……………」

霊夢がバックジャンプで距離を取り、お祓い棒を振り上げる。

「まったく、疲れるから嫌なのよね、コレ。」

ブツブツとなにか呪文のような言葉を呟き、お祓い棒を振って祈祷する霊夢。それを見ながら何もできず、歯軋りして死にかけの力ナ

ブンのように這いつくばる吉影。吉影が固唾を飲んで見つめる前で、
祈祷はものの数秒で完了した。

あまのいわとわけのみこと
「天石門別命」

霊夢が厳かに呟いた。

「……………ッ！！！？」

ゴオッ！！

吉影は唯一動かせる目すら見開いたまま固まってしまった。

「なっ！なんっ…！？」

宙に浮く霊夢の足下に、漆黒の円が出現した。

「そ、それは…！」

ゴオオオオオオオオオ

円は石畳を呑み込みながら拡がっていく。

「【ルーミアの闇】と同じ…………？」

いやッ、違う！これは……………これはッ…！」

拡散する闇の円盤が、吉影の身体を呑み込もうと目前に迫って来た。

「これは……………【穴】だ！途方もなく深い【穴】だッ…！」

闇が到達し、吉影の身体を支える石畳をかき消した。身体がガクツと穴に堕ち込もうとする。

「【キラークイーン】ッ…！」

彼は自分の【スタンド】の名を叫び、穴から引き揚げさせようとした。
た。

だがしかし…………

「なあッ

！？」

【キラークイーン】は彼の呼び掛けには応えなかった。

「なんだとオオオオオ

！？」

吉影の両腕からは、なれ親しんだ筋骨隆々の腕のビジョンは現れず、

【穴】の淵へと伸ばした手は空を切った。

「そんな…バカな…！スタンドが封じられるなど……！」

彼の身体は重力に従い、伺い知ることのできない闇の底へと向かい始めた。

識のうちに仕舞ったというのか？」

どんなヒドイ時にこそ…最悪の時にこそ、【チャンス】というものは訪れるという過去からの教訓。それが彼の高い知能を覚醒させた。「いや、それ以前に、この【穴】はなんだ？墮ち始めた瞬間に見たが、この穴には側面があった…実際に見たり聞いたりしたことはないが、【空間の狭間】とかなら横にも無限に広がっているんじゃないか？」

吉影はハッと閃いた。強く輝く希望が、光が、彼の精神を照らす。奈落の闇の侵略を止め、絶望を打ち払う。

「そうかッ！これは…これは【夢】だッ！！わたしの中だけで起こっている、ただの【夢】ッ！」

彼の身体が、落下を止めた。重力から解き放たれたように、フワリと浮き上がる。

「これは…幻覚だ…！！」
彼の身体から光が漏れ出した。光は闇を消し飛ばし、拡散し、染み渡っていく。彼の視界いっぱいにかわいらしい光が広がっていった

……………

「は……………っ…」
彼は目を開けた。その目の1cm下には、境内の石畳が広がっていた。

「…ぐっ」
吉影が顔を上げると、そこには靴があった。その上にあるのは、彼を見下ろす霊夢の姿。

「たいした外来人ね、あなた。神様の幻覚を看破するなんて。なめていたのはお互い様ってことね。でも……」

言葉とは裏腹にたいした感動もなく霊夢は話し掛ける。

「もう動けないんでしょ？指先一本……」

「ぬうう……」

吉影は呻くことしかできない。実際、先程の幻覚による精神ダメージで彼は【キラークイーン】を動かすことができずにいた。

「もう決着はついたわよ。早く帰りなさい。まっ、その様子じゃ歩けないでしょうけど。」

射程距離に入っているのに何もできず、悔しさを噛み締める吉影。そんな状況で……

「おいっ！なんださっきの光と弾幕は！？いったい何を……！！」
妹紅が文字通り飛んで来て鳥居をくぐり、そしてこの光景を目撃した。

「お、おいっ？川尻、どうしたんだ！？何故そんな傷だらけに……」
彼女の目が霊夢に移る。

「霊夢っ！お前っ川尻をこんなにしたのかっ！彼は外来人だぞ？何故こんな……！」

「（まずいつ妹紅に介入されては、さらに話がこじれてしまう……こっちから先制攻撃したこともバレてはまずいし、何より……妹紅ではコイツには勝てないッ！）」

怒りに髪から火花を散らす妹紅を、吉影は呼び止める。

「やめろ……妹紅……」

「川尻！？どうしてだ？こいつは……」

「いや……いいんだ……これは二人で同意して行った【スペルカード戦】の結果……わたしが負けた、それだけだ……」

「【スペルカード】？霊夢っ！お前っ川尻に何故そんなことを……」

「あら、【交渉】が決裂したからよ。幻想郷での争いの解決方法がこれだって話したら、あっさり乗ってくれたわ。」

「なん…だと…？お前から持ち掛けたのか！？卑怯なっ！そんなことを言ったら、川尻は戦うしかないじゃないか！！」

「妹紅、【スペルカードルール】では、負けた方がおとなしく引き下がるのだろう？だったらルールにしたがって……………」

「何を言っているっ！こんなヒドイ出来レースにルール違反もへったくれもあるか！！」

「妹紅…頼む、お願いだ…………ここで言い争っても何も解決しない。それよりもわたしは人里に戻りたいんだ…………早く診療所に行きたい……………」

「……………川尻……………」

吉影の弱々しい声に、妹紅はひとまず怒りを抑え、彼の所まで飛び、彼に肩を貸した。吉影はボロボロの身体に力をこめ、なんとか立ち上がる。

「お帰りのようね。じゃ、夜道に気を付けて。」

霊夢は無愛想にそれだけ言い残すと、二人に背を向け神社に戻ろうと……………」

「（…っ！?）」

霊夢は身震いして振り返る。その先では、妹紅に肩を貸されて鳥居をくぐるうとしていた吉影が、こちらを振り返っていた。

「（何…？いま、一瞬だけ、とてつもない…【殺気】…が…！?）」

吉影は、妹紅に悟られないように、正確に霊夢だけを射抜くように、殺気を発した。

霊夢をギロリと睨み、心の中ではただひとつのことが渦巻き反響していた。

霊夢…確かに彼女は強い。今の吉影では、本気で殺すつもりで闘っても、いくら策を練っても、到底敵わない。だが

殺意、憎悪をこめて睨み付ける。

霊夢との闘いの中で、吉影は【絶望】したことはあったが、【恐怖】を感じたことは一度もなかった。

霊夢からは微塵も殺意や殺気が感じられなかった。

たからだ。つまり、彼女は吉影を殺すつもりなど毛ほどもなかった。また、そのことは彼女が【外の闘争】を経験したことはないことも表していた。

つまり、狂気の殺人鬼と楽園の素敵な巫女では、殺し、殺されかけた経験が桁違いなのだ。吉影にはそれがよく分かっていて。だから彼は心の中で繰り返し、呪詛のように呟いた。

「（【始末】してやる…！）」

霊夢から目を離し、妹紅の背におぶさりながら、吉影は憑かれたようにそう繰り返していた。

「（【始末】してやるぞ…！わたしに【赤っ恥】の【コキツ恥】をかかせてくれた、守銭奴巫女…！わたしの【平穩な暮らし】を邪魔してくれたクソアマ…！！きさまの生きてきた十数年の間、殺しも残虐もないぬるま湯の世界の中で、感じたこともなかった【死の恐怖】を味わわせてやる…！！）」

二人は鳥居をくぐり、沈みゆく夕日の方角へと飛び出していった。境内にひとり残った霊夢は、がらにもなく真剣な表情をして、ポツリと呟いた。

「 晩御飯、何にしようかしら…？ 」

第五話 鉄拳交渉（後書き）

第五話、いかがだったでしょうか。

楽しんでいただけたなら幸いです。

霊夢には悪役を演じてもらいましたが、私は彼女を【自由奔放】と捉えているので、悪者っぽく描くのに苦労しました。

次回からはつかの間の日常パートです。お楽しみに。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編（前書き）

第六話です。予告通り、つかの間の日常パートです。お楽しみください。

前話までとは違い大幅な書き直しを行っていないので、未熟な文章になっております。ご了承ください。

【ジョジョの奇妙な東方Project@Wiki <http://www28.atwiki.jp/shinatuiki/page/s/1.html>】より転載。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編

日もすっかり沈み、妖怪のお客様を迎える支度に忙しく賑やかな人里。その忙しげな物音からそう遠くない寺子屋は、昼間の生徒たちの騒ぎ声が嘘のように静まりかえっていた。その明かりの見当たらない玄関の引き戸が、静かに開かれた。

「……………」
開かれた引き戸の間から、妹紅が音も無く家に入った。ただいまの一声もなくフラフラと2、3歩進んだかと思うと、バタリと倒れこむ。彼女がただいまと言わなかったのは、別に帰宅が遅かったことを慧音に怒られたくなかったからではなく、声も出ないほど弱りきっていたからだ。

「ゲホツ…ゴホツ…、ゼエ…」
妹紅は苦しげに咳をした。彼女の息は引き戸の隙間から聞こえる表の居酒屋のオヤジの声をかき消すほど荒く、激しかった。

開いた引き戸から鋭い光が玄関を控えめに照らした。淡い明かりの中倒れ込む妹紅の服は、顔は、髪は、血に染まっていた。長く艶やかな彼女の白髪は今では固まった血によって赤黒く変化している。ふっと彼女の伏せた顔を照らしていた光が、影にすり変わって消えた。ピクリと妹紅が顔をあげ、衰弱した身体を強引に使役し、震えながらもなんとか振り返る。

引き戸の隙間には、玄関への射光を遮った影の所有者の姿があった。彼の自慢の背広からは大量の鮮血がレインコートの上であるかのよう弾かれてポタポタと流れ落ちていた。

「か…川尻…」

逆光によって影になっている顔からはその表情を読み取ることは

できなかつたが、その口が獣のような荒い息づかいを刻んでいることは見るまでもなかつた。

「川尻：川尻：か…勘弁してくれ…」

妹紅が懸命に声を絞り出す。その悲痛な響きが聞こえているのかわいなのか、彼はユラリと引き戸の隙間を抜け、なにかに取り憑かれたようなフリフリとした足取りで動けない妹紅へとにじり寄った。影が妹紅の足元から膝、腰、胸、顔へと、ゆっくりと覆い被さるように彼女の四肢に重なっていく。ガクガクと震え喘ぐ妹紅の目前に吉影が迫り…その場で崩れ落ちた。

「ガフツ…ゼエ…ハア…ゼエ…ハア…だ、だから何度も言っただろう…と…飛ばしすぎだ、つて…！」

「ハア…ゴホツ…だつて…日も暮れてしまったし…急がないといけなかつたから…それに、時間がかかったのはか…川尻が、無視していい妖怪まで相手してたからだろう…？」

「あ…あれは君のアクロバット飛行を止めさせよう…」

そう、二人は日没後の森の上空を人里目指して飛んで帰っていたのだが、それと同時に進行して夜になって活発化した妖怪共との壮絶な死闘を繰り広げていたのだ。吉影を背負っているため思うように戦えない妹紅と、霊夢の件でイライラがピークに達していた吉影。二人のモチベーションの相違が波瀾万丈の夜空の逃避行を演出したのは言うまでもなかつた。

二人はそのまましばらく玄関に倒れ附し、荒い息を整えていた。床が妖怪共の返り血で汚れるのも構わず。

「そう言えば…慧音は、どうしたんだ？」

「明かりがついてなかつたから、多分買い物かなにかで外出してるんだろ。」 息が鎮まってきた二人が寝転んだまま会話する。

「あゝあ、血でべとべとだ。慧音に怒られるう…」

「全くだ、早いところ洗い流して乾いた綺麗な服を着たい…」

「ど〜かん…。早くひとつ風呂浴びて風呂あがり酒を一杯…」
ザツと二人は同時に立ち上がり、さっきまでの瀕死状態は見る影も無く、我先にと風呂場に向かって走りだした。この時間なら慧音はすでに風呂をわかしているはずだったし、二人共お互いに長風呂であることは知っていた。早く全身の血鏝の臭いから開放されたい二人は、相手より先に風呂場へ滑り込む必要があったのだ。競走は飛び疲れて走ることしかできない妹紅に比べて、キラークイーンの脚を使える吉影の方が有利に進んだ。コーナーをザザツツとドリフトする吉影、その後ろに食い付く妹紅。バタバタと大人げない争いを繰り広げて風呂場へ向かう二人。さあ、勝者は…

吉影だった。彼は妹紅を僅かにリードし、ラストスパートをかけて風呂場の入口にたどり着い…

「ひゃあっ!?!」
「…ッ!?!」

ザザツツと急ブレーキをかけ風呂場の入口を覗き込んだ吉影が見た光景は、一糸纏わぬ姿で佇んでいた慧音だった。

吉影は驚きに目を見開き、慧音は突然の出来事にバスタオルで身体を隠すことすら忘れていた。

慧音の肌は血色がよく赤みがかつていて柔らかな質感を付加し、頬は上気し艶やかな肌と胸の谷間は健康的な彼女の四肢を一層美しく見せていた。

さらに身体から立ち上る湯気、滴るお湯は甘い香りを広げ、幻想的な雰囲気醸し出していた。

そんな健全な男子なら酩酊すること必至の状況下で慧音は言い知れぬ動悸を感じていた。

彼女の心臓が一気に跳ね上がり、身体が真夏の直射日光を浴びているかのようにカツと熱を帯びる。

ドクン…ドクン…、

鼓動が耳の奥で響く。

そして…

「すまなかった。」

その状況は一瞬で消え失せた。吉影は慧音に気付いた瞬間顔を背け、ばつが悪そうにそう言つと、いとも淡泊に立ち去つていった。ひとりぽつんと残された慧音はしばらく呆然としていたが、正気に戻ると、

「…なんだ、この敗北感は…」
すっかり凹んで長い溜め息をついた。

「おいおい川尻、あんた慧音の裸見ても何も思わないのか？」

だいたい状況の予測はできている妹紅がからかい半分驚き半分で吉影に話し掛ける。

「思春期はとつくに過ぎているからな。」

「いや、それは多分関係ない…」

「慧音が服を着るまでの間、着替えを持つてくることにする。」

吉影はそそくさと自分が貸してもらっている部屋へと向かった。

彼が慧音の裸体を見ても心が動かなかったのは、彼の特殊すぎる嗜好のせいだ。知つてのとおり、彼は女性の手首に性的魅力を感じる独特の趣味がある。つまり、彼にとって女性の最も魅力的な部分は手首であり、一般的な女性はそれらを恥じることなく露出させているため、今更衣服の有無など問題ではないのだ。ある意味、羨ましい男である。

「…というわけだ。」

「…まさか霊夢が…博霊の巫女ともあろう人間が…」

「なんだ川尻、そんな大変なことだったならやっぱりあの時に…」

「いや、いくら闘いで打ちのめしたとしても彼女が首を縦に振ると

は思えないし、何より君は彼女に勝てるのか？」

「……………」
妹紅が悔しそうに俯いて黙り込む。

その後、吉影、妹紅の順に風呂に入り、遅めの夕食をとった後、三人はちゃぶ台を囲んで話をしていた。吉影は博霊神社で起こったことを、自分を悪者にせず、なおかつ二人をあまり刺激しないよう、オブラートに包んで話して聞かせた。吉影の話術はうまくいったようで、二人は激昂するのではなく霊夢の異常に狼狽した様子だった。

「……………」
ところで、話を逸らして悪いが、君の能力と
いうのは……………」

慧音が興味を持ったのか問い掛けた。

「ああ、わたしはそれを『キラークイーン』と呼んでいる。精神エネルギーの具現化というべきかな。容姿は…こんな感じだ。」

キラークイーンに筆で紙に自画像を描かせた。精密動作性が上がったおかげで、かなりうまく描くことができた。

「ほう…これが『キラークイーン』、君の能力か……………」

慧音と妹紅が紙を覗き込んだ。その猫とドクロを合わせたような、不気味な顔を持つ人型の異形をまじまじと凝視する。

「これを使って少し離れた物を持って来たり、物を壊したりできる。特殊な能力は…そうだな、幻想郷風に言うなら…『花火を作る程度の能力』かな。」

「花火？」

「そう、音と光を出すことができる。」
「なるほど……………」

二人が顔を上げ、吉影に目を向けた。彼はすまなさそうに、

「悪かった、君達を騙して……………」

「いや、謝る必要なんてない。外の世界で【能力】を持っていたらどうなるか、君がどんな人生を送ってきたか、うつすらとなら分かる。こちらこそすまなかつたな、君の心の傷に気付けなくて……………」

「……………」

「他の人物には、言わないでくよ。君が決心をつけるまで…」

「…ありがとう、慧音。」

「当然だ。君の安全は、私が責任を持つ。だから安心してくれ。」

ひとしきり会話が終わり、残る話題はひとつ、最も大きな問題だった。

「…あのさあ、そんなお金どうやって貯める？」

妹紅が仕方なく切り出した。吉影と慧音は押し黙る。妹紅も慧音もそんな大金はない。

「…働いて地道に稼いでいくのかなさそうだな。」吉影が憂鬱そうに呟く。他の二人は俯いていたが、慧音がパツと顔を上げ、

「そうだ！私の寺子屋で教師をやってみないか？」

「教師…？」

「そう、私は歴史が専門で、他の教科はあまり得意じゃないんだ。

川尻なら数学や外の科学を教えられるだろう？」

「いや、まあ、確かにできないことはないが…」

「じゃあ、話は決まりだ。早速明日からやってみてくれ。」

「…分かった、頑張れるだけやってみよう。」

吉影は渋々承諾した。彼は二流で文系とは言え大学卒だし、あれだつて本当はもつと上を目指せたが、あえて抑えたのだ。数学なら問題ないし、科学も簡単な素材で実験はできる。彼にとって問題なのは、人里の子供に注目されることだ。彼はどちらかと言うとあまり子供が好きではないし、その親にも注目されることになる。だが、いつまでも謎の外来人ではそちらの方が目立つ。ここはあえて危険を冒して自分を好人物だと人里の住民達に思わせるべきだ。彼は決心した。もう人里の中では『クソガキ』という言葉を使わないことを。

「しかし、そうなるとわたしの給料は君が負担してくれるのか？そ

うなら君に迷惑じゃ…」

「大丈夫、寺子屋の経営費はすべて人里全体が負担している。君の給料なら人里が負担してくれるはずだ。」

「そうか、ならいい。」

「じゃあ、早速明日の授業の予定をたてようか。私の部屋へ来てくれ。妹紅、君は…?」

「ああ、今日は疲れたから泊まっていくことにするよ。空いてる部屋で勝手に布団敷いてもう寝ることにする。」

「そうか、じゃあ、川尻、付いて来てくれ。」

「あ、ああ…。」

吉影も早いとこ眠りたかったが、慧音について部屋を後にした。

翌日

「さあ、お前達、こちらが今日から数学と科学を教えてください。川尻先生だ。くれぐれも迷惑にならないように。」

「はあい、先生。」

吉影は教卓に立っていた。彼は生徒達の好奇心の視線集中砲火の中、気を落ち着けて自己紹介を始めた。

「わたしは川尻浩作、皆知っているだろうが外来人だ。今日から君達に…」

「あれ、川尻先生?」

最前列の生徒が声をあげた。吉影が目を向けると、その生徒は二ヤニヤ笑い、

「『わたしは慧音先生の夫になる男だ』が抜けてるんじゃない?」

吉影が首をかしげるが、生徒達は爆笑して

「よかったね慧音先生! いい男が外からやってきて!」

「川尻先生優しそうで物静かそうだしね!」

「何となくエリートって感じするし!」

「だいたい、先生も未婚なんでもったいないと思ってたんだよ、前

から！」

「ねえねえ、慧音先生とはどこまでいったの？」

吉影はどう扱ったものかと慧音に目を向けたが、彼より彼女の方が慌てふためいていた。

「うるさい！川尻先生の初授業だぞ！変な質問をするんじゃない！早く宿題を提出しろ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る慧音を見て生徒達も満足したのか、後ろの席から前へとノートが回されていく。慧音は最前列の生徒からノートを集めると、

「じゃあ、後は任せた。頑張ってくれ。」

そそくさと教室から立ち去った。

教卓に残された吉影は、予定通りに準備を進める。

「先生、それなに？」

静かになつた生徒達が、吉影が取り出したものを見て質問する。

「ああ、これは銅線を正方形に曲げたものだ。」

吉影は言いながら着々と準備をしていく。回路を繋ぎ、最後に人里の診療所、竹林の薬剤師の病院支部で買った塩酸をセットする。

「よく見えない者は前に出て来なさい。」

後ろの席の生徒が教卓の周りに集まる。生徒達の期待が高まる中、

吉影は塩酸に銅板と亜鉛板を入れた。ブクブクと泡ができ、銅板と亜鉛板に銅線で繋げたモーター（ちゃんと磁石を配置してある）が、クルクルと回った。

「おおー！！！」

生徒達が感動の声を漏らす。吉影はスイッチを切ってモーターを止め、またつけて回すということを何度か繰り返す。生徒達の目は好奇心で輝いていた。

「先生、どうしてなにもしてないのにコレは回るの？」

「ああ、それは簡単に言うと、電気が流れるからだ。」

「デキキ？」

「そうだ。君達が見たことあるのは、例えば雷や静電気

冬に服を着る時のビリツとくるやつがそれだ。」

「ええっ！？雷は神様の力なのに、あんなセコイいたずらにも使われてるの？」

慧音に『あまり子供達に幻想郷の概念を壊すようなことは教えないでくれ』と言われていたので、吉影は適当に答えることにした。

「雷は神様が電気を使って起こして、ビリツとくるやつはただの自然現象、この実験の電気はこの液体から出ているんだ。」

「ふうん、雷って冬のアレを神様が使い方を変えて起こしてたんだ。」

納得顔をする生徒達。「ねえ、なんでその『デンキ』が流れるとコレが回るの？なんで『デンキ』ができるの？」

「ああ、説明できるが、多分聞いても分からないぞ。」

「それでもいい！教えて！」

「…分かった。じゃあ…」

黒板に図を描き、説明を始める。

「まずどうやって塩酸から電気が流れるかだがそれは塩化水素HClが水中で水素イオンと塩化物イオンに電離して、亜鉛は銅よりイオン化傾向が大きい。そのため塩化物イオンの電子に引き寄せられて電子を残して塩酸中に溶け出し、その残された電子が亜鉛板から銅線を通って銅板にたどり着き、その電子を水素イオンが受け取って水素が泡となって出て来るんだ。そして何故モーターが回るかというと電気が流れると磁界が変化するという性質があつて、磁場と電流の相互作用【ローレンツ力】による力を利用して回転運動を出力、半回転し、ブラシによつて電流の向きが変わるからさらに半回転、また向きが変わってさらに半回転…と繰り返して連続回転するんだ分かったか？」

生徒達の頭上には、大きく『？』が浮かんでいた。

「どうだった、初めての授業は？」

「ああ、成功だ。科学は理解させることはできなかったが、興味を持つてくれたようだし、数学も文字式

外ではaだ

とかxだとか使うところをカタカナに置き換えて教えたらずくに理解したようだった。この調子だと、三日くらいで方程式を教えられるだろう。」

「そうか、それは良かった。」

吉影と慧音の二人はちゃぶ台で向かい合って夕食を食べていた。

「今日はまだだが、明日からは宿題の答え合わせをしなければならぬから、忙しくなるぞ。」

「そうだな。」

「宿題ノートはその日の内に返すのが一番良いから、私が授業をしている間に答え合わせをしてくれ。」

「…そうだな。」

「ノートには一言ずつコメントを書いて欲しい。それがあると生徒達のやる気が大分違うんだ。」

「……………」

「…川尻、どうしたんだ？ずっと俯いて。」
ハツと吉影は顔をあげる。

「い、いや、明日の授業はどうしようか考えててね…」

嘘だ。彼はずっと鑑賞していたのだ、慧音の手首を。ゆるみかけていた頬を慌てて引き締め、彼は誤魔化す。

「そうか、熱心で何よりだ。」

慧音が微笑む。

「そりゃあ、これから7、8年は続けていかなければならないからな…」

しばし沈黙が流れる。生活費は慧音が負担してくれるので余計な買い物をしなければ給料はそのまま貯えになるが、それでも霊夢の要

求した金額に達するにはそれだけの年月がかかるのだ。

「なあ、川尻…」

慧音がそつと顔をあげ、慎重に言った。

「ここで暮らしていく気はないか？」

「…は？」

吉影は呆気にとられた表情を浮かべ、慧音を見る。

「いや、違うんだ！そういう意味じゃなくて…！！」

慧音は顔を真っ赤にして慌てるが、吉影は別に誤解してなどいない。

「それじゃ本末転倒じゃないか。わたしは外に帰るために働いているというのに…」

慧音が自分の深読みに顔を赤らめ、焦りつつも言う。

「今すぐじゃなくていい。でも、少し考えておいてくれ。」

「…すまないが、わたしは何年かかっても外に帰るつもりだ。わたしには帰らなければならない理由がある。親の面倒をみななければならない。」

「…そうか、すまなかった…」

慧音がまた俯き、会話が途切れ食事を再開する。吉影も箸を動かすが、彼は実際には味なんて感じないほど上の空だった。

「（ああ…美しい…【君】はなんて美しいんだ…！！）」

吉影は【彼女】に目を落とす。その滑らかな指が、上品かつ妖艶な動きで箸を操る様子を観る。その柔らかなすべすべの白い肌が醸し出す、背徳的なまでの魅力を、五感で感じるさまを想像する。

「（わたしは…わたしは絶対に【君】を連れ帰るぞ…！！たとえ何年先になろうとも、『君』をわたしの【恋人】にして、外に連れ帰ってやるぞ…！だから、それまでどうかそのまま置いてくれ…！今のままの、綺麗で若々しい姿でいてくれ…！！）」

吉影は心の底で、固く硬く決心し、願った。

第六話 今にも荒れだしそうな空の下で 前編（後書き）

第六話、いかがでしたか。楽しんでいただけたなら幸いです。
次回も日常パートです。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6146y/>

～吉良吉影は静かに生き延びたい～

2011年12月22日15時53分発行